
エデンの死角

堀 ゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エデンの死角

【Nコード】

N6153X

【作者名】

堀 ゆう

【あらすじ】

各地で当たり前のように起きる事件。そのごく一部にはErrorsと呼ばれるモノが関わっている世界。五年間を失った男、上池常夏。保護と称された依頼には常にErrorsが関わっている。そんな奇妙な事件をどのように決着していくのか——！？

プロローグ

二種類の生き方がある。

自然に委ねていく生き方と神に委ねていく生き方。

どちらに従うべきはわからない。

誰かが導いてくれるわけでもない。

ただ、そうして人生は過ぎ去るだけ――

今日も女は訪ねてきた。

「こんばんは。だんだん寒くなってきましたが体調の方は大丈夫ですか、ジヨウカ」

秋も終わり。季節の変わり目。

日中はそこまで寒くないと思っていたが、やはり夜には急激に気温が低下していた。

時刻は七時過ぎ。

「実は、ここに来る途中に聞いたのですが、どうやら最近変わった風邪が流行っているらしいです。なんでも、普通の風邪と違い高い熱が出て体中の関節が痛むといった症状が出るようで……」

と、ビニール袋を渡される。中を確認すると様々な薬が入っているが先ほどの会話で必要と思われる風邪薬だけが見当たらない。

……まあ、これはいつものことだ。

俺がそんな感傷に浸っていた隙に女は早々と靴を履き捨て脱衣所へ向かっていく。そんな、女の後姿を睨みながら覗いてやろうか思ったが、キツと睨まれそそくさと退散。

家には狭いながらも露天風呂がある。家の横にある池に写る月を見ながら入れるベストスポット。その味をしめたのか、あの女はここを銭湯だと勘違いしたかのように毎日通いつめている。

居間へと続く廊下窓から露天風呂が見える。湯気のせいでハッキリとは見えないが女の姿が現れる。

いや、そこはタオルを巻かずに素肌を見せやがれ。

「ジョウカ。あなたは就活という言葉を知らないのですか。こういう日もダラダラして……。いくら学歴が高校中退だからと言って、就職口がないわけではないのですよ。それなのに毎日のほとんど過ごして。あなたはもう社会人なのだとわかっていますか？」

風呂上り開口一番。

「わかってないのはおまえだよ、アンリ。仕事を探したり、働くのは生活するうえで金が必要なヤツがする事だろう。俺は金が無いわけでもないし、生活するうえで足りないわけでもない。だいたいお前も似たようなものじゃないか」

「…むう。確かにお金は有り余るほど持っているようですが、それとこれは関係ありません。私が言いたいのは社会的な、一般的な常識を言っているのです。——後、言っておきますが私はちゃんと仕事をしてますよ、ジョウカと違って」

最近になって気づいたが、二年間でかなり成長してやがる、とあの二つの盛り上がった山を見て思う。ふふんっ、と胸を張って言いやがるアンリエール嬢。

どうやらこいつは俺にまっとうに生きて欲しいようだ。——まあ、なんていうか二年前からずっと。

アンリはベッドの上に腰を下ろした。

俺は枕側の位置に腰を下ろすと、そのまま体を横にする。アンリは胸元まで伸びた髪を拭いているようだ。

その、アンリの横顔を、ボウと見つめる。

アンリ・シャリエールという少女に出会ったのは二年前。

近年、様々な文化の欧米化が進む日本。ジャンクフードや高カロリー
の食生活による激太りで命の危険に晒された者や何をき違えた
のかこれは流行るだろうと海外から次々取り入れた拳句暴走し最後
は消滅するという現代の日本で、日本の文化、いや日本が好きで堪
りませんという日本人より日本人らしい大和撫子風外人。——希
少種だ。

外国人にしては明らかに東洋風な顔立ち。おそらく自身とさほど変
わらぬ背。ケータイも持たず、というより使えない。流暢な日本語
髪は黒髪だが、毛先などが白く見えるせいか鈍色に見える。

はつきり言つて外人というより一つ前時代の骨董品のような日本人
に見えてしまう。ただ、目の色だけが日本人離れしていてそう見え
そうで見えない。本人はいたく、その事を気にしているせいか眼鏡
をかけて隠そうと必死。

まあ、それが変に似合ってしまったてキツイ印象を受けるのだが。し
かし、これはこれで流行りの服を着飾ったらそこいらのモデルなん
かよりいいのではないだろうか——

「先ほどの続きですが、ここの神社を再開するのはどうですか。それなら、壊れている物を直して残っている物を手入れする位で手間は掛かりませんし、なによりご先祖様が残してくれた物を活用しない手はないでしょう？」

「ああ、それは無理だ。あそこは何代も前に神社として機能してない」

「なら、どうして鳥居や賽銭箱など残っているのです。使わないのなら邪魔なだけで処分するのではないのですか。でも、残っているというのはそれこそご先祖様の方々がいつか再興してほしいと考えたからなのでは？」

「んなことは知らん。……仮にだ、この神社再興して人が寄りつくと思うか？——知らないと思うが市内じゃ有名な心靈スポットで広まってるぞ、ここ」

「神秘的な趣があるのは好都合ではないですか。人が勝手に集まってくるなら後は綺麗に掃除をすれば立派な神社です。————だいたい、これだけ立派な神社だというのに放って置くなど日本人としての常識が解りかねます」

嫌の方向に進む話に眉をひそめる。

心霊スポット、イコール、神秘的とアンリの中では変換されたもよう。おまえの常識が解りかねえ。

そもそも解りかねるって、放って置くことに何か問題があるのか？別に法に触れるような事は一切ないはず。

まあ、アンリはそれよりも俺が何も職に就いていない事を気にしているようだが。それにしても違法でもなんでもない。たんに社会的にアウトローな生活を送っているだけ。その事に不満もないし、むしろこれはこれで満足できる生活だと感じてる。

金銭面の問題に関しても個人が持っているのかと思える遺産がある。ほら、今の俺の生活に問題など無いはずだ。

……だというのにアンリはそんな俺の在り方を心配する。いや、ほんと、いつになったら無駄だと気が付くのかね。

上池常夏とは二年前に出会ってからの知り合いだ。
かみいけじょうか

観光としてこの地にきた私は祖父からよく聞かされていた話を頼りに各所を見て回っていた。

そんな折、ここ、大暮市に立ち寄った時町の住人から奇妙な話を聞いた。

——この町の山にはすされた神社がある。

日本で見るものすべてが新鮮に感じていた私にとってその話は興味が湧くのと、歴史的価値のあるものではないのかと考えるには十分すぎるもので、すぐに足を運んだ。その時に神社の住人であるジョウカと出会った。

神社の横のジョウカの住まいである屋敷から出てきたジョウカを見た時、住職ないしその息子か、あるいは関係者だと思った。なにしろ作務衣を着流していたからだ。

しかし、ここで違和感を感じてしまった。——髪が白いのだ。染めたような違和感ではないし、この風景に合っていないというわけでもない。

近づいて見れば理由は簡単。

その髪の男は、少年と言っても差支えない顔なのだ。

そして、それがジョウカとの出会い。

以来、この町に滞在することにした私はジョウウカの数少ない話し相手、友人となった。

神社は特に歴史的価値があるものでも、どこその宗派に属している訳でもなかった。そのためかジョウウカは、どうでもいい、といった感じで神社の管理はずさん。たまに家の周りしか掃除をしないのだ。

しかし、そんな言動とは裏腹に容姿は出来過ぎなくらい神社関係の事に合っている。

一度だけだが、着物を纏った姿を見たことがある。それはジョウウカの撫で肩によく似合っていて、瓦礫が散乱するこの神社が神秘的な場所にさえ見えたほどだ。

しかし、それはあくまで本人が必要と感じたとき以外は着ることはなく、二年見てきたが未だにその一度だけだ。そのため普段着は作務衣を着用し、文字通り山奥で余生を過ごす世捨て人な格好をしている。ただ、だからといって髪はボサボサに伸ばしたり、ひげを生やしたりはしていない。背丈は一七〇位で私より少し大きい。

この町の住人は良くも悪くもジョウウカの事を知っている。あまり良くない話しか聞いたことがない。——とにかく髪が目立つのだ。

それがひどく嫌だと感じている。ジョウウカは気にしていないようだ

が私にはそれがとても受け入れがたい。私は彼に恩を感じている。だからと言って二年間もこの地に留まる理由にはならないが。それでも、ジヨウカのために何かしたいと感じる。

私らには感じることも、見ることも出来ない何かを静かに見続ける瞳。自分が何より魅了されたジヨウカの目が自分にとって、上池常夏という人物のすべてだ。

あの日。

ジヨウカと出会った瞬間から――

「さっきの流行ってる風邪の事だが」

「え？――は、はい。ここ最近から前兆のようなものがあつたらしいのですが……」

「……？ どうした」

「いえ、ただ今頃になってその噂に違和感というか疑問を感じたので……」

「噂の話にはどこか綻びがあってもよくあることだろう。そんなの当たり前的事を考えるようなものだ」

だいたい、アンリはバカ正直過ぎ。もっと楽に生きる。

「いえ、話の内容じゃなく、その話そのものに違和感があると言いますか…」

なにそれ意味わかんねえ。だいたい純正の外人が日本語で言葉遊びなんかするな。

「なにそのインスピレーションに頼った言葉。ここは日本ですよ」

「……む、何を言いますか！言っておきますが私の国ではそういった微妙な表現は使いません。むしろ、日本語こそ中途半端な言葉が多いではないですかっ！」

ガー、と元気よく、礼儀正しくかつ叫ぶアンリ。中身外人のくせに流れるような日本語を使いやがる。

「…たとえば？」

「『ひらひら』とか『ゆらゆら』とかです！」

…確かに海外から見れば日本語は外来語も混ざって難解だろうが、擬音の言葉に関しては表現が豊かだと思ってほしい所だ。だって、それこそアンの言いところの日本の美徳ってやつに他ならないと思う。

「……それ、どっちもほぼ意味同じだろ」

「…えっ？そ、そうなのですか！？ 私はてっきり……。——
——というか話が逸れてますっ！えーと、私が言いたいのは……」

はあ、とため息を吐き頭を抱えるアンリ。出会ってからずっと、この芸風である。ブツブツと呪詛めいた独り言を呟いているが『これだから日本は嫌い……』、——聞こえてしまった。

大雑把に言うと、基本的には日本の事が好きなのだが、先ほどのような事やちよつと躓けば暗黒面が出てしまう典型的なお嬢様気質の方である。ははは、マジ扱い困る。

「それより話の続き。お願いします、アンリエール嬢」

ブスッと、不機嫌を通り越して、親の仇を見るように殺意の目覚め

た波動を出しながらこちらを睨む。

威圧感、当比社二倍！

「……簡潔に話します。先ほど言った違和感というのは話の出所が分からないということです」

？出所が分からないって、噂話はそんなものじゃないのか？

むう、と頭をひねるアンリ。

「いえ、これも違いますね。半紙の出所が分からないというのは、私自身がその噂を聞いた覚えがない、と言ったところでしょうか」

それはまた、別の意味でややこしい話だ。

それは詰まるところ、アンリは誰かからその風邪が流行っているという話を誰かから聞いたのではなく、その風邪が流行っているという情報がいつの間にか記憶に入っていたという事だ。

「一応聞くがそれって今日聞いた記憶として入ってんの？」

「そのように記憶します」

「誰かから聞いたのを忘れてるだけって可能性は？」

「ありえないです。第一に、この噂に疑問を持った原因が今日はジョウカ以外に人とは会っていない事からきているので」

記憶の操作か或いは……。

これはまた面倒事を持ち込みやがりましたね、君は。

俺は物心つく頃からそういった出来事に遭遇しやすいと思っている。

奇々怪々。

そこらに蔓延る都市伝説から伝承に伝わる魑魅魍魎の類まで多種多様である。

そのうちコスミツクなモノまで出てくるのではないのかと、内心ドキマギしている。

マワリさん曰く、それは領分が違うから大丈夫、とか言っていたがあの信用ゼロのスマイルで答えられても全くフォローになっていない。いや、あの人にフォローなんてされる方が裏があるのではないのかと余計に心配だ。

「話はよくわかった。じゃあ、アンリ。お前は今日からここに泊まれ。寝るときはこのベッドを使っても構わないから」

「？ 今日には泊めてもらおうと思ってましたが、今日からとは明日明後日もここに泊まっていという事ですか？」

「泊まっていではなく、泊まれ、だ。——一応言っておくが、これは決定事項だから。文句はいくらでも聞いてやるが、内容の変更は一切受け付けない」

「…それは別に構わないですけど——」

「後、この家から一步も出るな」

「…ばっ——！？なんですか、それ！意味が解りません！！」

ポフポフと布団を叩くアンリ。ははは、お前が面倒事を持ち込もうとする方が意味わかんねえ。

「悪いがお前をここに監禁する事、これ、もう決まったことだ。お前も承諾したし」

「くっ、勝手に決めないでください！というか私をここに出さない理由の説明を要求しますっ！！」

「え？だって、このままだと面倒事に巻き込まれそうだし」

「それとこれと、何が私に関係しているのですかっ！？」

理不尽極まりないとこちらを睨むアンリ。ずれた眼鏡から紫の瞳が伺える。その眼は雅な雰囲気と惑わす印象があるが、邪気を感じない。だから、こいつはそういった類を引き寄せやすいのだ。アンリがこの家に来るようになってから遭遇、あるいは発生率が右肩上がりなのがその証拠である。

それにしても、勝手に入っている記憶、か…。正直、興味はある。しかし、今さら脳の神秘について話をされてもつまらない。

なんで今は、手頃な所で楽しんでおこっ。

「で、さっきの噂の内容だけど」

今更なんですか、とこちらを睨むアンリに向けて、

「おまえ風邪が流行ってるっていうが、症状から言ってインフルエ
ンザじゃね？」

今更ダメだしを言ってみる。

ブログ（後書き）

この作品は誤って削除してしまった作品を再投稿したものです。前回、掲載していた時と変更したところがありますが、基本は同じです。

十月も過ぎ、記録的猛暑だった二か月前が少し振り分ければこの肌寒い気温もちょうど良くなるのではないのかと思う今日この頃。

時刻は朝の八時前。

テレビを見ている。

内容は、最後の締めなのか天気予報が流れている。

『——続きまして、大暮市方面は今日一日晴れ模様が続き、気温も高く過ごしやすい一日になるでしょう
最後に全国のお天気を——』

テレビから外に視線を移す。

視線の先には灰色の風景をバックにした風景が一つ。

……あのお天気キャスターはそろそろ降板の時期なのだろうか。確かこの朝のニュースに出るようになったのが二年前だったはず。出た当初は整った容姿に初々しさというのか若さを武器に売り出し人気を博していたが、その武器は徐々に陰りが見え始めていた。そも

そも若さを武器にしている時点でいつかは衰えるのは分かっていたはずだ……。

ただ、降板するということならそれはそれで惜しい気もする。あの娘を見るのは、それはそれで楽しみの一つだったんだが。いや、無くなるものへ感情が湧き出たところで結局俺は――

「――んっ、……うん」

おもむろに後ろから手が伸びてきた。手は何かを探しているように手探りに俺の頭と顔をベタベタと触ってくる。そして、俺を荒らすだけ荒らした手は力尽き、背後から、何だ、ジョウカですか、と言。

その後、規則正しい寝息が聞こえた。

背後の人物に顔向け、寝顔を見える。

「……よだれがひどいぞ、おい」

ため息を一つ。

今日の天気は俺の気持ちを表すようにとてもイイ天気でお天道様にありがとうの気持ちでいっぱいになりそうだ。だから、そんな神様にお礼がしたいからちよっと顔を出すくらいして欲しいと思う。

—— やばい、すげえ憂鬱だ。

今日はもう、何もしたくない。今日は寒いから家から出たくない。もうすぐ冬だから食い溜めして冬眠してしまいたい。物置にはこの冬を越すには十分な食料がある。^{インスタント}いや、冬どころか一年は持たせてみせます。

だから、さっきから鳴り響く電話には出ないつもりだ。

じりり、じりり、と一昔の音を家中に鳴り響くコール。早く、早く、と催促するように鳴り響くコール。

「……今は出れませんよー。出て欲しいなら春になってからでお願いしまーす」

そんな抵抗もむなく——気づいてから数えたコールは三十回を超えた。なかなかしぶとい。電話の主は余程の暇人なのか、或いはこの住人がなかなか電話に出ないことを知っているのか。

「……だから、出ませんって言ってるのに」

コール数……もはや数えるのが面倒な数字になった。それでも催

促し続けるコール音。

電話の主はこの住人の事を知っている人物なのは間違いない。
これは出ないと後々面倒だ。仕方がないと思い、立ち上がる。

未だに鳴り響く受話器の前。

何とも言えないあの憂鬱の気分を台無しにした犯人に悪態を吐きながら電話を取る。

家である神社から徒歩で二十分。
町中の商店街の抜けた先にある小高い坂。

この坂の向こうの森には楽園がある――

登り終えた先に世界から逸脱した空間、光景が広がっている。崩れ

た建物、辺りに転がる瓦礫には草や花が生い茂り、まるで戦争後に人の手が加わらず、何年も放置された自然だけの風景。そんなイメージがペロンと綺麗にはまる。町の風景と見比べれば、ここだけがぼっかり置いてけぼりをくらったようにさえ思える。

ここは元病院跡地。

二十年近く前、老朽化という事で新たに病院を立て直そうと計画が進められたらしい。当初は古い病院を取り壊し、そこに建てる予定だった。しかし、この土地の地盤の問題が発覚した翌年、別プランに変更となる。取り壊し作業中であつた元病院は、半分以上取り壊した所で中断となり、新たな場所に建てれる病院へ作業が優先的に行われた。

中断された取り壊しだが、本来は新しく病院が建てられた後に再開される予定ではあつたが、予算の都合なのか未だに再開される目途は立っていない。付近の住人から苦情が殺到したし、一度は再開されるような話は出たが、結局役人たちはそこをそのまま放置した。結果、苦情は何年も続き、毎年のように問題として挙げられた。

が、十年前。

ある人物がこの土地を買い取り、そのまま廃墟と化した病院跡地に住み着いてしまったのだ。

「――、げ」

東棟。

そこだけが唯一残った建物として機能している。しかし、機能しているとは言っても外見は見るも無残な廃墟だ。

その二階までしか原型の無い病院の付近を掃除している男を発見。ロープを羽織っているのが、ヒョロつとした体格だと判断できる。今一番会いたいけど、会いたくない人物である。

無意識に横っ飛びをし、道の端にある草むらにてスニーキング開始

新たに人を雇ったのだろうか。前に来たとき見たことのない美人ちゃん発見、おーば。…しかし、ここに普通の一般人がここに居るなんて何かあったのか？まあ、どうせなら美男美女同士どっか出かけてくれ——ねえか、やつば。

箒を持っていたお兄さんは近くのお姉さんに何やら指示を出す。どんな指示をされたのか。こっちにやって来たおっとり系のお姉さんは何も知らずに俺を発見。悲鳴よろしく口を開けて箒男の近くへ涙目で走っていく。
さすがマワリさん。やってくれますよ。

もそもそと草むらから出る。

「はい。こんにちは。最近、顔も出さないから野たれ死んだと思っ

ていました」

俺としてもこのまま死んだ事になってた方がよかったですよ。

「——おっと、そうでした。今日はもうやることは無いので帰ってもいいですよ」

俺とマワリさんを交互に見ながら困惑を隠しきれない美人ちゃん。そんなことお構いなしに帰らせようとするマワリさん。

マワリさんに挨拶をして早々と帰る美人の人。……あつ。

しまった。

今この場に残ったのは俺と箒を持った変人だけだ。

「さて、質問が何点ありますがよろしいですか、屑」

マワリさんはいつものように蔑みながら言い捨てる。この、聖職者に見える格好をしたイケメンは遠野周。とあのマワリこの十年近くお世話なったり、なられたりした性悪生物。脳内ではトオマワリさん、と呼び名に補正が掛かる。

「おや、あまりにも長く穴倉に引きこもったせいで言葉も忘れましたか」

本気でゴミを見るような顔はやめてください。すごく不愉快だ。

「お久しぶり。隠れるのは秘めたる特技の一つのつもりだったんですけど、一瞬で見つかりましたか。いや、朝から目ざといねマワリさん」

「常夏^{とこなつ}くん。キミ、気づいていないのですか。作務衣着た白髪の青年なんて、嫌でも目に付いてしまいます。……まったく。やるならもっと人目のある所で不審な行動をとってください。キミの場合、職務質問一つで留置場行き決定なんですから」

「冗談。マワリさんこそ精神鑑定でも受けたらお仲間のところへ行けますよ」

「ふふつ、それは大丈夫。私はあなたの仲介者ですよ。あの程度の探り合い、とうの昔に克服しました。ですから安心して豚箱に入ってください」

マワリさんは相変わらずのようだ。見た目イケメン、中身最悪。

近所付き合いは良好なうえに月一で社会への奉仕活動をしているため市内の役人や警察からも信頼されている。何しろ苦情を言っていた住人達をまとめ上げた人物だ。おまけにあの見た目で聖職者のような偽善っぷり。多分、あの人を悪人だと疑う人間はこの町に俺しかないと思う。なんて言っただってこの人は前科持ち。しかも詐欺の。そんな人間は社会復帰したとしても社会の隅で前科があることを隠して生きていくものだ。

しかし、この人は自らその事を町の人に喋ったのだ。それもまだこの土地に来たばかりの頃に。住人達は困惑。一時的だったが苦情が五割増し。近所の住人からはハブ。常人であるなら耐えられないほど嫌がらせを受けていたが、それでもマワリさんはこの土地に留まり、聖職者の真似ごとをした。それを十年間、変えることなく人々に恩を売りまくった。

結果、今現在の信頼と親愛を勝ち取った。

たった十年でこれ以上、底がない状態からここまで上がってきた力リスマの塊のような人間だが、本人はいたく不満なようだ。何しろマワリさんの思考は常人の斜め上にある。おそらく、市民を味方はこの町を掌握しようと策を講じているに違いない。

「——キミね。その、人を食ったような顔やめなさい。刑務所で囚人に笑われているようで、すごく不愉快です」

「何を言ってるんですか。マワリさんこそ取り繕った善人みたいな顔してますよ」

「それはそう見せているのだから当たり前です。これ、いろいろと便利なんですよ」

柔らかく笑うマワリさん。完璧すぎて胡散くせー。

「ところで今日はどのような用件があつてここ来たのですか？」

「どのようなつて、俺が来た以上は一つしかないでしょう。マワリさんが仲介した依頼の件です。依頼されたのはいいですけど、ほとんど情報を超越さなかったんで。仲介者であるマワリさんなら何か知ってるのではないのではと来た次第であります」

「…キミは仲介屋を便利屋か何かと勘違いしているのではないですか？」

仲介と言えば聞こえがいいが、実のところは面倒事を俺に押し付けているだけなのである。

「依頼主に君の番号を教えるのが私の仕事でね。その内容に関しては一切関知しない。…そんなルールすらわすれてしまったのですか？」

ただ、その面倒事を放り出すことも他の人に頼むことも出来ない。

Errors——俗物的に言ってしまうえば、日本で言う魍魎魍魎の類。国外では悪魔やら妖精やら。そんな化物達を管理、あるいは保護をして人類を守る事を目的とした非法法の組織に属している事が、遠野周の本職だ。∴正直、どうして人類を守る会みたいなモノにマワリさんが入れたのか。

マワリさんは基本、自ら動くことはない。動くのは俺が担当しているからで————とかあの人を動かすようなことは出来れば避けたい。マワリさんが動く時は保護というの名のジェノサイドが始まるのだ。人権とか一切なく、手段も問わずの殲滅作戦。さらに相手の生死は問わずのオマケ付き。

「∴いえ、その辺はよく理解しています。何も言わず、名にも関わらず、ただ遠くから傍観することがマワリさんのやり方ですからね」

「その通り。∴ですが、あなたの頼みというなら少なからず協力しても構わないとも思っています」

なにやら裏を感じれずにはいられない笑顔で答えるマワリさん。

しかし、だ。

今回の情報は情報が無さすぎる。今はそんな事を気にしてられない。

「じゃあ、聞きますけど。今回の依頼についての情報を本当に何も知らないってことは無いですよね？」

「知ってます。おかげで余計な面倒事が増えてしまってますね。これでは私も動かなければならないかもしれない。…まったく、些細な事というから点数稼ぎに志願したというのにこれでは話が違ってきましたね」

この人は自ら動くことをせず他人を動かして、後でおいしい所だけを搔つ攫っていく人間なので、自分が動くことは嫌いなんだろう。でも、現場で動くマワリさんは、腕が二本とは思えない指示と動きを魅せるらしい、と聞いたことがある。——ホントこの人、何者？

「いえ、あんな屑の事はどうでもいいですね。それで常夏くん。キミは、いま町で流行っている噂の内容は知っていますか？」

「話を聞けばインフルエンザが流行ってる話ですか？ それなら昨日の夜に聞きましたよ。なんでも、何時どこで聞いたのか全くわからないみたいな話らしいって」

「それはアンリちゃんが言っていたのですね？」

あ、なんだろう、マワリさんがスゲー不気味な笑顔でこっち見てる。
…マジで怖いだれかたすけて。

「常夏くん。何度も言いますが、言いたいことが三つあります。一つ、屑は屑らしく生きろ。一つ、アレとは縁を切れ。一つ、私は、アレが嫌いです」

「ホント何度も聞きましたね、それ。まさに生理的に受け付けられないに」

「あたりまえです。あれで眼鏡をかけていなければ、二度とこの町に居られないようにしていたところです」

「いやいや。アイツはアイツで清く、正しく、をモットーにやりますから。そういうのは勘弁してやってくださいよ。それに少なからず役に立っているでしょう？」

「…ふん。本当にそう生きるためにこの町にいるなら問題はないです。……で本題ですが、さっきの噂が私の面倒事は一つがそれなんです。キミの言うとおり、噂の出所は全くの不明。いつの間にか勝手に記憶の中に入っている。おそらく、そういった操作の出来る類が動いているとみています。これがそれに関する資料です」

いつ、どこから出したのか。数冊の本を押し付けられた。いろいろ助けてくれるのはいいんだが、明らかに利用されているのがわかる。だって、マワリさんいい笑顔ですから。

「……………あの、マワリさん。これ、ただの妖精とか妖怪に関する絵本にしか見えないんですが」

「それで間違いないですよ。…まあ、手元にある資料がそれしかなかったんですよ。童心に帰るのも悪くないと思って目を通しておいてください」

嫌がりながらも一緒に資料に目を通してくれるマワリさん。苦笑いしながら説明してくれる。こうしていれば本当にイケメンなんだけどな。マジもつたいない。

「というか、噂だけで被害なんて出てるんですか？」

「だから面倒事になってると言ったではないですか。噂程度なら私
が動かずとも問題ありませんが、問題があるとするならば、その噂
を（・）聞いた（・）（・）人間が（・）噂と（・）同じ（・）（・）症
状を（・）訴えて（・）（・）いるん（・）（・）です（・）（・）よ（・）
」

それはまたマワリさんにとって嫌な流れになってきたね。そして、俺にとっても嫌な流れになりがったし。

「まさか。噂程度で被害が出るなんて」

「キミの方にも出ているのではないのですか、常夏くん？」

………… いやだなあ、隠し事ばれてんですけど。

「悪い事ばかりではないですね。おそらく、これ以上協力しない方が私にとって都合がよさそうですね」

「げっ。ここまで話しておいてそれりやないですよ。それに点数稼ぎはどうするんですか？」

ふむ、と顎に手を当てながら考えるマワリさん。しかし、これはただの振りだ。この人に正義なんて一握りも存在しねえ。

「面倒なんではお願いします。何、君の事だ。どうせ明日には解決させているはずですから」

これが、何回目かの、悪魔の降臨する現場を持った瞬間だった。

大暮市には市が運営していた工場があった。

大暮造船工場。それが工場の名称だ。

工場を作る話が決まった時、かなりの話題となった。多くの地元
の住人やほかの町からも多くの雇用が確保できるとあって、市の大
きな経済効果を与えると予測された。そして、工場が完成してみれ
ば予想以上の結果をもたらし、その周辺には食堂や売店といった店
が構え活気かるものとなった。

もつとも、それは一年前の話である。今では老朽化が進み取り壊
すことになったが、そこで働いていた人たちは職を失い、それにつ
いての対策が決まったのがつい半年前の話だ。

三棟ある工場はもぬけの殻だ。鉄板を加工する機材も船を動かす
ためのクレーンもありはしなかった。夕暮れという事もあって昭和

の名残のように寂しさを感じる。

一番奥の建物が怪しい。なんていつても他の建物と違って完全密封型だ。なんのためにそんな構造に何てるのかは知らんが。あれなら何かよくない事をしていても外には漏れない。

ここに来たのはマワリさんからの情報によるものだ。

『あそこで良くない事が起きたことは知ってますね』

死人は出なかったみたいだがそんな事件があったらしい。

『事件の内容が不可解なものでしてね。今回のとの関連性は絶対ではないですが、あると思いますよ』

そんなマワリさんの口車に乗せられたような形でここまで来たが、明らかに利用されてるね。

正面の入り口は錆びついて開かなかったが、裏口が開いていたので構わず侵入、侵入と。

コンクリートの通路を音を立てながら歩く。空が曇っているため、

天井の隙間からも明かりがない。辺りの輪郭さえ把握できないほどの暗闇。一寸先は闇。そんな中を壁伝いに通路を進みながら気づいた。

「……溢れすぎだろ、おい」

奥に進めば進むほど空気が濁っていく。海が近いせいもあるのか、とても酷い匂い。普通の人ならここで引き返すか躊躇する場面だが、困ったことに俺はまっとうな人間ではなかった。

——神隠し。

子供の頃。俺はどうやら、そんな御伽話のような不思議体験をしたらしい。

約五年間。

俺はその長い時間、この世から消えていた。その間、両親は必死に俺を搜索したらしい。警察に届け出て、貼り紙をしたり、知りうる手段を講じたらしい。

そして、そんな親の心配や苦勞を知らず、俺は五年後にひょっこり帰還した。

親類、或いは知人、警察の方でも死者が蘇ったぐらいのショックを受けたそうで、いや、つまり俺は世間的に死んだ事になっていた

のだ。：まあ、当たり前だが。

そして自身も、それほど大げさではないけれど、ある衝撃を受けていた。

自身に確証を持ってない。今までの記憶と身に刻まれた年月がどうもおかしいのだ。心と体がずれている。正確に言えば、これは身体の方は問題ない。問題なのが心だ。消えていた五年間の記憶、思い出せないのではなく、全くないのだ。

身体だけは成長したが、精神は昔のままなのだ。まあ、なんていうか、中身は別のところに居て、この体を操作してみたいな他人の体を動かしている感覚でひどく気持ち悪い。

医師達からは過度のストレスによる記憶障害——俗に言う記憶喪失と呼ばれるものと診断された。

いつか思い出す、なんて無責任な事を言われたが、それは本当に取り戻せるのか。答えはまだ出ていないが、ここに帰ってから十年間、それらしい断片的な記憶すら思い出せていない。これだけ聞けば絶望的ではないが、正直、可能性の事などどうでもいい。

思い出さなくていい、いや、思い出したいくないとも感じている。今更そんなものに未練はないし、取り戻した所で迷惑極まりない。

だから、あの五年間は死んでいた。
そう、思っている。その方が安易で楽だから。

…ただ、そんな考えを持つようになってからだ。

何かを『失う』事に脅威を感じなくなった自分に気づいたのは。

記憶の一部が欠ければ、感情も一部欠けてしまうのか。或いは自己防衛だったのか。不思議なことに、記憶の紛失と共に、俺の心も欠けてしまった。

肉体を失われる事で、精神が欠けるということは聞いたことはあるが、記憶の欠損によっての心の損傷もないとは言い切れないと思う。少なくとも、上池常夏という人間はそのケースに当て嵌まる。

マワリさん曰く。持っている人間と持っていない人間。持っている人間は持っているモノに気づく事が難しく様々ながらみに囚われやすい。何も持っていない人間は何もないため純粋に混ざりものが少なくそれが故に強い。ただ、どちらにもメリットもデメリットが存在しますのでどちらが正しいとかなないとか。

結局、何が言いたいのかさっぱりだったが。ようは俺は何も持っていないためにマワリさんにとって使い勝手のいい駒なんだろう。…まあ、仕方がない事だ。人生の四分の一は死んでいたのだから。

ようやく通路の終わりが見える。どれだけ歩いたのか。奥からの日の光がとても眩しい。

開きかけてドアを開ける。

その先には――。

なんとか、無事に廃工場を抜け出せた。

放って置けば大暮市に新たな心霊スポットが誕生するのは明白だが、一週間前に起きた事件以上の事は起きないだろう。…ただ、取り壊し作業は進まないだろうが。

「……まあ、寂れた町だし。階段の一つや二つ増えたところで問題ないと思うであつた、まる」

それに、この町に数少ない怪談話を担う神社の住人として、熟せばいい出来になる話を潰すわけにはいかない。そもそも、情報が間違っていたんだからこれぐらい見逃してもいいと思う。唯一、気がかりなのが目的の手掛かりがなかった事だが。それは明日、マワリさんに文句を言えば事足りる。

さあ、帰ろうか。

今日は一日中動いて疲れたし、丸一日絶食ははつらい。家に帰れば非常食にありつける。

急いで、帰路につこうと早足になる。

——ふと、廃工場へ振り返る。

出来れば errors なんて輩には関わりたくない。関われば見たくもないモノを見せつけられそうな気がする。

今の俺は限界だ。これ以上、他人とか気持ちとか記憶とか、その重さは背負えない。今背負っているのも両手を使ってギリギリだし、自身も強いわけでもない。これ以上強くなれるとも思えない。なりたいとも思えない。今あるものでどうにかしておくしかない。

まあ。これは俺の薄汚い意地みたいなものだ。

小さい頃から時々、変なモノが見えた。

それは他の人には見えず、俺にしか見えていなかった。

俺だけの、俺の為だけの世界……
そう、感じずにはいられない世界がそこにはあった。

「…ホント、馬鹿だ」

家の帰り道。

途中には移り建てられた病院がある。

どこぞの有名な人物がデザインと設計に関わったらしい。なんでも次世代の担う新たな病院を表したとか何とか。素人からすれば、何がどう他と違うのか分からない辺りが特徴の建物。

近くには百台は軽く停められる駐車場があるが、半分以上埋まった光景を見たことは未だ皆無。市民の血税が無駄使いされたである。真面目にやれよ市役員。もっとも、俺は一銭も税なんて払ってませんけどね。

まあ、実際にはマワリさんがその辺の事を処理してくれているのだ。

こちら側に帰ってきた俺は記憶の他に失ったものがある。戻ってきた時、俺の目の前に広がる光景は丁度葬式の真っ最中だったのだ、両親の。

原因は自殺。動機は、失踪した一人息子の手掛かりが五年間一切

見つからぬ事の不安感からの突発的な心中、という事らしい。どうやら俺の親は俺が死んだと思ったらしい。勝手に殺すな。

ただ、そんな両親でも残してくれた物あり、それがあの神社と莫大な遺産だ。両親は死ぬ前に色々手を回してくれたようで、資産の管理をある人物に任せた。その契約には、もしも俺が戻ってきた時の事も含まれていた。

その辺りは感謝に堪えないが。ただ、任せた人物が非常にまずい。なんて言ったって、我ら弱き者の敵、遠野周その人。その結果、上池常夏にとって遠野周は仲介者である以前に保護者でもあるのだ。あはは。——誰だよ、こんなに俺の命運握らせた馬鹿は。

マワリさんにとって、これ以上ない話だったろう。俺が戻ってこなければすべて自分の物になり、戻ってきてても資産の一部を自分のものに出来る上に、好きに使える犬を獲得できたのだから。

両親との約束を守って社会的弱者である俺の保護者を買って出てくれた事は感謝しているが、保護者の肩書を盾に厄介事を押し付けてくるのはやめて欲しい。

真っ暗な空が背景である病院を見上げる。

病院というだけあって、それがよく似合っている。怪談話の一つになってもおかしくない。

建物の表面には行儀良く並んだ窓ガラスで、今は月明かりだけを反射している。

時刻はもうすぐ十二時を回るところ。当たり前だが、病室の階から明かりはない。みな眠りにについているのだらう。

その時、つまらないものが目にとまった。
屋上の下の五階、一室の窓。

窓から次々、町へ飛んでいく。いや、流されている。

風邪は無い。夜気の冷たさはもうじき冬が到来するのだとわかる。

ふわり、ふわり。イメージはタンポポが種を飛ばす光景。
しかし、飛ばしているのは種ではあるが、それは噂の種。

ぶるりと、体が疼き、体が震える。
もちろん、肌寒くて。

理解は出来てしまった。

面倒ではあるが、見てしまったのは仕方がない。

そうして、種は真っ暗な海を漂うように流れていった。

「ほう。ではあそこにはそんなものが蔓延んでいるんですね」

マワリさんは何か嬉しそうに答える。

アレの放つオーラを感じたくなかったので、出来るだけ離れて椅子に座る。まずいコーヒーを啜る。

頭上の空は穏やかだが、目の前のアレは穏やかではない。

一際強い風が吹いた。

それは廃墟裏に広がる森の奥へは音を立てて消えた。

ここは廃墟内にある中庭である。

取り壊しの際、偶然に出来た産物。

これは中庭ではないとか誰かが言っていたが、俺にはどうにも中庭というイメージしか湧かないため勝手にそう呼んでいる。

天井だけが崩れ瓦礫が床に散乱しているが、位置や開いた天井の場所が良かったのか。ここのフロアだけは明るい空間となっている。

「では、さっそく市長に連絡を入れておきましょう。どうせ、結果はどうあれ取り壊し作業は再開するみたいですから」

昨日ぶりに会ったお兄さんは何が楽しいのか、すげえご機嫌。

「それにしても怪我人の四人の内、一人が重傷ですか。…む、ちょっと、常夏くんこれ見てください！精神に異常ありと診断された数が二桁を超えています！二桁ですよ二桁？作業中、極度の錯乱状態に陥り、正常な判断が出来なかった、か。いやいや、よっぽどあそこが気に入ってるようですね」

「そーッスね。居心地は良さそうに見えましたから。…多分、本業の人が来ないとアレ、無理そうですよ」

あの造船所の取り壊し作業中に作業員が錯乱し、重機を暴走させた挙句、同僚に怪我を負わせた騒ぎがあったのは一週間前の事。幸いなことに死亡者までは出なかったが、その後、作業を引き継ぐ業者が現れず作業は中断したままである。

当然だ。死亡者こそ出ていないがここまで大事に、しかも精神異常

者が出たなんて聞くだけで関わりたくない。人災が出ては仕方がない。誰だって何が起こるかわからない曰くの仕事はやりたくない。

「むむつ。備考……、数年前から度々、目撃情報があったと近隣住人から証言あり……証言の信憑性はともかく、市で独自に調査する必要あり……いやいや、調査などせずにさっさと工場一帯を爆破してしまえばすぐに済む話ではないですか」

ふふふ、それが出来ないから調査が必要なんだと思いますよ。後、さつきからパラパラと見てる資料、明らかに重要な役所の資料だね？

「しかし、これでは建物内に入って準備しなければならないから無理そうですね。いっそ空爆でも……おや、これは市長からの提案……敷地内のお被い……。いや、ほんとこの市長さんは何を考えているのだから……ははは、やはり却下されてますね」

未だかつて無いほどに上機嫌なトオマワリさん。超饒舌。超怖い。こんな悪魔が大暮市で野放しになっているなんて誰も思っまい。

「それで常夏くん、本題に入りますが。——本当にそれを見たのですか？」

「あー、まあ、そうです」

「興味深いですね。特に噂の種を飛ばしている、なんて表現を使うあたりが」

「――」

「冗談です。さて、――いや、でも、内容はともかく表現そのものには興味を抱きましたよ」

「いや、ほんと、マワリさんのフォローとか鳥肌ものなんで、さっさと返事ください」

そして、早くここから逃げ出したい。こんな状態のマワリさんを相手に尋問なんて拷問に等しい。

「では、ノー、と答えておきましょう。今回の件、確かに死体こそ出ていませんが、被害は出ている。つまりこれは保護の対象になります。――よってキミの言う処置は承諾しかねます」

やっぱりかあ。いや、わかってたけどね。ただ、出来心みたいな思い付きで言ってみただけ。

「…それにしても。昨日はそうでもなかったですけど、今日はいつもに増して積極的ですね」

「俺だって偶にはエサ代くらいは働きますよ」

「いい心がけです。屑は屑らしく、強者に従っていればいいのです」

すごいなあこの人、この勢いで一生こき使う気だ。

「ところで、常夏くん。その正体は掴めたのですか？」

そんなの俺が知りたい。病院で飛んでいたのが噂を流している犯人だとわかった。

しかし、それで噂の内容が発症するのはおかしい。今回の事件に関して、アレは単に噂を流行らせるという役割でしかないはず。というよりそれしか能のない怪異。空想を運ぶだけで現実になることは無い。

しかし、この噂は流行り病のように人から人へ移って発症する。…この事を知ると病も噂も似たものだと思えてしまう。どちらにしても、人から人へ移り流行るものだし。

「噂を流す方は、なんとなく。ただ、噂が発症するのはさっぱり。

……やっぱり、これって」

「人間もこの件に関わっている、そう、言いたいのですね」

マワリさんは嬉しげに、清々しいまでの殺意で気温が下がる。

……まいった。さすがに危機管理に疎い俺でさえ、身の危険を感じてしまった。

遠野マワリはerrorsと呼ばれるものにはそこまで嫌悪を見せないが、それに加担、或いはそれらの力を乱用する人間を許さない人だ。

宗教的なローブが普段着の変人にとって、敵そのものだ。

……少し記憶に耽る。ずれた心と体。その使い方を教えてくれたのは、初めて依頼を受けた時の事だった。

Errors。

この名前に由来はhumans errorから取られたものらしい。

Errorsとは本来、見えないものが見えたり、その見えない存在の力を使う人間の事を指していた。超能力、霊能力、魔法使いと呼ばれる者もそれに属している。

しかし、それら全ての能力を行使するうえで、媒体となる存在が必要不可欠であり、それら媒体の補助、或いは媒体となる存在の力を使い、現実に影響を与えている。

そして、その媒体が妖怪や悪魔、妖精など空想的な存在であり、世界を構築する、木、火、土、金、水、風、空の七つの元素でもある。

……例えば、平安時代に活躍したという陰陽師と言えば。怪しげな呪詛を呟き、式神を従えて妖を退けて都を守った。式神は陰陽師の卓越した能力の象徴でもある。

古来、式神は『識』神と記されることが多かった。この文字は古代中国では『魂』、『精霊』に近い意味を持った言葉でもある。その中には『使鬼』という表現もある。

式神は『識神』であり、隠された知識を『識る』ことで、意のままに操る事の出来る霊的な存在。それはつまり、妖と同じ存在とは考えられないだろうか。

空想の存在ではなく、人の身ではなし得ぬ事ができる人間のerrorが、空想を現実にする人間こそがerrorsと呼ばれるのが本来正しい。

——しかし、そこに人のエゴが発生した。

“人間は許容の狭い生き物です。自らの行いの非を認めず、別の何かにすり替えてしまうものです。それが他人だったり、神だったり……”

Errorsと呼ばれる人間がなんらかの害を発生させる時、必ず触媒が必要となる。それがどのような場合でも。そして、一部の人間はこう考えたんだろう。

『我々はそそのかされたのだ』

自分たちの罪を不確かなものに押し付けたのだ。後は、言うまでもないが時間の経過と共に少しずつ改竄されていき、今では空想が現実になり替わってしまった。

いや、別にそれが悪いとか言いたいわけではない。そうやって人は積み重ねてきたわけだし。

“——ああ、勘違いしないようにね。全ての事が悪いのではなく、世界の半分が悪なのです”

人間ひいきで言えば、魑魅魍魎の類が悪で人類が善。Errorsが人をそそのかして悪行へ走らせる、と言ったところがお偉いさん

達の見解だろう。

何もしてなくとも悪として見られるなんて堪ったもんじゃないが、あちらさんは、その事を気にしているのだろうか。…意志とか無い奴いるし、その辺は微妙だな。

まあ、騙される方も悪いと思うが、そう思いたくないのも人間って生き物らしい。

“ はは、キミにはわからないだろうね。常夏くんのは、まっとうに生きてきた人の考えです。いいですか、こういうのは悪である事を責めるのではなく、どうしてその行為を行うかを考慮すべきなんです”

だから、どっちにしても同じなら、どうでもいいと思うようにした。だって、いくら害がないって言っても、結局 error なんだから。

「それで、常夏くんはどうするのですか？それだけやる気になってるのだから、まさか、このまま引き下がるつもりはないですね」

「そのつもりですけど」

「おやおや」

ご愁傷様です、と合掌するマワリさん。いや、あんたがするとシャレになんねえです。——マジ、通報とかしやがりそうだ。

「でも、常夏くん。いつもやる気のないキミが、なぜこつも積極的なんでしょうか。何か良い事でもありましたか？」

まあ、今回のケースは今までは違うと感じてる。

「ああ、なんとなく読めましたよ。なんだ、キミ、半年も仕事が出来なかったから飢えていたのですね」

コーヒーカップで口元が見えないが、薄気味悪い笑みで笑っているのがなんとなくわかる。

「はあ？何それ、全然違いますよ。いつもは終わった後すぐに次が来たりで、あんまり休めなくて疲れてただけで、なにより今回ののはアイツが——」

あ、何言ってるの。やっぱ、飢えてるより質が悪い俺。

「ないない、それはないから、そんな気色悪い理由じゃない。……ほら、つまりあれっスよ。今回のってイタズラみたいな軽い悪意みたいなものじゃないですか」

つまり動機だ。今回の噂話の事件は、噂さえ聞くようなことが無ければ発症する事はない。もし、目的があって行動するなら、こんな噂を聞かなければ害の無い、なんて回りくどいことはしない。やるならもっとシンプルでわかりやすいはず。

だけど、今回ののは、何がしたいのか分からない。目的が無い。人を困らせたいのか、誰かを殺したいとも思えない。遊び感覚でやっているように思える。

「ほう。要するに信念の無い悪行はただのお遊びで、噂を広めて個人が楽しむだけの行動は目的のある悪意より罪は軽いと言いたいのですね、常夏くんは。でも、おかしいですね。発症するような噂が流れる前は、同じようにいつの間にか聞いていたようですが、“無害”そのものでした。しかし、今流れているのは“害”のある噂。遊び軽い悪意なら、なぜ、噂を流すだけに留めなかったのかな？」

「それは」

どこにでも流行りそうな“無害”の噂。最近になって蔓延する“害”のある噂。

言うまでもない。イタズラはエスカレートしていくものだ。

「目的はなく噂を流しているだけなら、どうしてそこに運悪ければ人が死ぬ可能性を出す真似をする？キミの言う、ただのイタズラなの？」

「だからそれは」

最初から目的があつて行動したのではなく。
途中から目的を持ってしまったのだ。

「そういう事です。もうただの噂を流すだけでは満足出来なくなっている。後、興味が持てそうなのが、噂が現実になることだった」

「でも、死ぬ可能性があるって。まだそんな噂流れてないじゃないですか」

「いえ、それがそうとも言えないかもしれませんが。——今朝、連絡があつたのですが」

日差しの中で、にんまりと笑う三日月の口。ようやく、本性出しやがった。

「男性が担ぎ込まれたそうです。症状から見ても、原因は不明。なんとか持ち直したようですが——ふむ、何時まで持つのやら」

ようやくわかった。あの変態はこの話で俺を揺さぶって、本当の意

味で俺をやる気にするのが目的らしい。だから、今日はやけに機嫌がいいわけだ。

「——流したんですかね、噂」

「さあ？私にはわかりませんね」

「そいつは、人間が憎いつてコトなのかな」

「？……、それは問題ではないと思いますが。けどまあ、死人が出るようなことになればそれまで。殺人事件ではないですが、私が動かざる負えなくなる。まあ、一時間もあれば済むことですから」

マワリさんの口車に乗せられるの癪だが、まあ、一応様子を見に行っただけはしてこよう。なによりも、ここから離れたいし。

「ちょっと、出ていきます。腹が減ったんで」

「おや？行くのですか。やはり常夏くんは頼りになりますね。——モノのついでに、もう一つ頼まれてくれませんか？」

「今日中に死ぬ予定があるなら聞きますよ、遺言として」

薄暗い風景から明るい風景に変わる。

精神的によろしくない人物から解放されたことを外の空気を吸って実感していた。

そうやって深呼吸して気づいたが、お日様は真上にある。おそらく昼を過ぎたところ。

軽く四時間は、あそこで話を聞かされていたことになる。正直、驚きより恐怖を感じてしまう。もしや、あそこには時間の概念が無いのでは。

いけ好かない変人は笑う。

クソッ。あの人になにか言われると余計なことまで考えちまう。

夜まで、後五時間。まだ五時間もあるのか、あと五時間しかないのか。正直微妙な待ち時間だ。

気がつくと夜になっていた。

気分はとても憂鬱。…なのに体はうずうずしている。

体は正直とはまさにこの事だ。気持ちはその気が無くても体が勝手に準備してやがる。

寝ていたソファから起きる。外は日が沈み暗闇に包まれているため、明かりがない部屋は真っ暗。

なんとなく、横のベッドに目をやる。

そこにはアンリが寝ている。なんとも緩みきった寝顔で殴りたくない。

時刻はジャスト七時。

乗り気はしないが、様子だけでも見に行くか。

ソファから立ち上がり、部屋を出ようとする。

「……ジョウカ？」

不意に、背後から聞き慣れた声がした。

「…悪い。起こしたな」

「いえ。ふと目が覚めただけですから」

…コイツ、本能的に察知したのではないだろうか。

「それで、ジョウカ。どこかへ行くのですか？」

「ああ、ちよっくら用事を済ませにな」

「…そうですか」

なんとも、アンリにしては齒切れが悪いっつーか。いつもなら咎められる筈なのに、今日はやけに大人しい。

「どうした。腹でも減ったか？」

「――」

返事が無い。嫌な予感を噛み殺す。

「…新しい噂、町に流れていますか？」

やばい、本気で眩暈がする。噂が発症する事を、今現在体験中のア
ンリの事だ。次に話す内容次第でどうなるのかは分かっている。

「噂、聞いたのか？」

零れた声は自分でもどうかと思うほど冷たかった。

反応なし。どう判断していいのか考えている矢先、

「――たすけて、ジョウ、カ」

震えた、今にも泣きそうな声を発して、倒れた。

「おい」

近づき体を揺さぶる。反応はない。噂を聞いて発症したのか意識を失っている。体の疼きが熱を持ちやがって頭を焦がす。半ば無意識にテーブルに置いてある携帯電話を手に取り、部屋を出た。

家がある山から下りて国道に出た。目の前にはタクシーが一台止まっている。今日に限って都合の良いことで。

構わず乗車。

「あ、もしもし。上池です。今から噂を垂れ流す馬鹿のとき、行くと思っっているんですけど、マワリさんの方で保護の要請を出してもらえますか？こっちは今から十分もあれば着くと思っんですけど。あ、やっぱいきなり過ぎて無理ですよー」

マワリさんでも俺の行動は予想外だったようだ。以外に使えないんだよね、この人。

「え、二時間待て？あー、それ無理っばいです。なんつーか、体の方がやる気満々なんで止められそうにもないです。なんで、マワリさんが来てくれれば問題ないはずですよ。はあ？隣町でロックバンドのライブを見てる？なにそれ信じらんねえ」

状況は最悪。Errors相手なら俺だけでもなんとかなるが、その後の後始末が問題だ。上手くやないと俺、捕まっちゃうからね。

「まあ、いいです。先行ってます。こっちが終わってなかったら援護よろしくです。場所は分かってますよね？はい、じゃあ交通違反とか関係なしにゴー、しちゃってください」

電話を切る。マワリさんの事だから一時間あれば着くだろう。

——さて。

不本意極まりないが、やらなければいけない理由が出来てしまった。相手に恨みとか憎しみとかそんなもんはないが、二度とこんな事が起こらないように徹底的にやろうか。

昨夜となんら変わらない病院は、今日も名に恥じぬ存在感を醸し出していた。

しかし、ガランとした空気が重い。なぜだろう。昨日と別段、変化した所はないのに。

「…そうか。今日は飛んでないのか」
さすがに連続はキツイのかな。

正面玄関を素通りして、非常口の窓を破る。

幸いなことに病院の警備はザルだった為、コソ泥よろしく不法侵入完了。しかし、ここからが本番。目標のねぐらは五階の一番端。そこまで気付かれずに行けるかどうか。

長い階段。一番上の階を見ようとするが、暗闇で何も見えない。ましてや、ここは夜の病院。普通なら引き返すのがまっとうな考えだが、俺には関係ない。いや、怖いものは怖い。

体の疼きが鬱陶しい。そんな反応しなくても、ここに何がいるかわかっているというのに。体だけ先走ったところ心が追いつかなければ、なんも意味がない。

今更だが、この体と自身の精神とのズレは十年間も味わってきたが、どうしても慣れない。まるで他人の体だ。違和感があっても年月と共に誤差が修正されていくものだと思うが、なぜ、こうも俺の体は全く馴染まないのか。

五階の階段を上りきる直前、夜の病院には似合わない歌声が聞こえた。

やけに耳につく声。

今の精神上、苛立ちでしかないはずの歌。
しかし、その歌声は苛立った心を鎮める。

耳障りだ。夜の病院で歌うなど、正気とは到底思えない。

通り過ぎる用のない病室。部屋から聞こえる寝息。暗闇ながら感じ

る生活臭。夜は静かだが、人が平和に暮らしていることがわかる。

そうしてたどり着いたのは一番奥のある今泉^{いまい}という名字の病室だった。

廃墟、墓場、残骸

入り口前で見据えるそこは他とは何ら変わらないものだ。だから、先ほど感じたイメージは俺の勘違いのはず。

そこには先ほどのように人が生活している感じが無い。あるのは、薄暗い空気の無数に漂う物体。もとは穏やかな存在だったろうと思うが、もともとが分からないため、予想でしかない。

そうして――気づけば扉に手を伸ばしていた。歌は未だ鳴り響く。発信源は目の前。

雲から顔を出した月が、暗い病室を照らす。賛美歌を歌っていたのは少女だった。病的と言えはいいのだろう。青み掛かった黒く長い髪。日の光を全く浴びていないような白い肌。病院というだけあってよく似合っていて、あまりにもそぐわない存在感だ。

外の景色を見ていて、此方に気づいていないのか、歌い続ける少女。

食べていなのか、或いは食べれないのか。歌声からは想像できないか細い身体。どこから、こんな歌声を出す力があるのかと疑問に思う。

自身から少女までの距離、三メートル弱。あと少し——あと二歩で俺の射程圏内に入る。……のだが、途中で漂う物体に阻まれる。邪魔すんな、クソ——

「こんにちは、珍しいお客さん」

邪魔してソレが知らせたのか。鳴り響いていた歌が止んだ。そして、此方へ振り向いた少女は丁寧に挨拶してきた。——おかしい。

「……ん？——あつ、そつかあ。今はこんにちはじゃなくて、こんにちは、だね」

ごめんなさい、と頭を下げる少女。——おかしい。少女は年相応の言葉使いでこちらに話しかけてくるし、こつちもはつきりと聞き取れているのだが、少女の口は全く動いていない。

「それでお兄さんは……。あつ、その前に自己紹介しないとね。私の名前は——」

少女は見知らぬ来訪者が来たことが嬉しいのか、ウキウキと余分なことをしようとする。

「いらない。そんな見合いのような事をしに此処へ来たわけじゃねえし」

「…そつかあ」

やはり、来客が来たことが嬉しかったようだ。少女は目に見えて落胆する。…しかし、どうにも口を動かされずに会話されるのは違和感が付きまとうな。

「じゃあ、お兄さんはどうしてここへ来たの？もしかして、私の歌を聴いてここへ来てくれたの？」

首を傾げて尋ねられる。

確かに歌につられてこの病室に来たといえは来たが、正確には町に蔓延する噂の事と昨夜この病室から飛んでいく噂を見てここに来たから少し違うのか。

「歌はこの階に上がってから聞いたから違うな」

「あれっ？ 違うの！？ てつきり私は……。…うん、そう、だよ。歌を聴いて来たならもつと早くここへ来てくれなきゃおかしいもんね……」

「おい。話が見えてこねえから」

「あれ？だから歌だよ？」

まずいなあ。頑張って懺悔だけでも聞いてやろうと思ったんだけど、その前に理性が吹っ飛びそうだ。しかも、相手は口動かさずに話してくるから人形と会話しているみたいで現実味がない。まあ、そんな事より噂を流したのはお前なのか、そこをハッキリさせる。

「——おい。一応聞くが噂を流してんの、おまえで間違いない？」

空間を漂う物体が肌を撫でる。うなじの骨が、不快感によって軋む。

「噂って、…どういうこと？」

「そのままの意味だよ。今も町で飛び交っている」

少女は何かを考えるように視界を窓側に向ける。そこからは大暮市

が一望できる風景が広がっている。

少女はパアッと思い出したようにベッドから降りて、

「うん！ 私がその歌をみんなに届けてるの。最初は聞いてくれなかったけど……」

ぺたぺたと、こちらに向かって歩き出した。周りに不愉快極まりないモノを引き連れて。…普通に逃げ出したい。

「もしかして。誰も聴いてくれないから、仕返しのためであんな噂流してるワケ？」

「ちがうよ。みんなが私の歌を聴いてくれないのは私のせい。私が出来の悪い歌を歌ったから聴いてくれないのはみんなのせいじゃない。…だから、前より出来の良い、派手な歌を歌えば、みんな聴いてくれる。私の歌を、気持ちえ、想いを聴いてくれる……！…そう、この子達が言ってくれたの」

どうでもいい位に聞き慣れた台詞、悲しげな呼吸。

…つまり、こいつはこの部屋に漂う物体の戯言に乗ったと言いたいらしい。

「だから届けるの。…ううん、届けないといけないの、今の私を…！そうすれば、みんな私と同じになって私の歌を聴いてくれる…！」

少女がどのような病魔に侵されているのかは知らない。俺には関係ない事だし、興味も持てない。ただ、解ることがある。彼女はおそらく、相手に自分の気持ちを伝える手段の一つを、言葉を失ったのだろう。話すことを。喋ることが出来ないのだ。しかし、上手く伝わらないのは自身が悪いと自覚しながら、確実に俺へ気持ちをぶつけてくる。

「だから、ごめんなさい」

これから同じ境遇になる人たちに対してなのか。とりあえず、それには俺も含まれているようだ。さつきから、俺の周りに漂うモノが増えてやがる。

「私にはこうするしか伝えることが出来ないの、こうするしかないの、これだけなの、これは神様が私に与えた試練なの、私にしかできない事で、私だけ与えられたもの……」

少女は伝えれないことは自分のせいだと言い、こんな体になったのは神のせいだと言い、自らの行いに対して自分を守っている。

——俺も人の事は言えないが、コイツはもうダメだ。周りを巻き込むことが嫌だと言いながら、他人を巻き込みやがった。しかも、自分に非があると認めておいて、結局それは居るのか判らないヤツのせいだとすり替えやがった。

ぺた。纏わりつくように漂うそれは俺の自由を奪う。らん。らん。らん。少女が歌っていた賛美歌が頭の中でリピートされ続ける。

「っ……………」

いくら歌が上手いと言っても、これでは大音量で聴いてるようだ。ましてや、歌は耳からではなく、直接頭に響いてくる。普通なら、とうに気がふれているところだ。

「大丈夫。お兄さんも私と同じになれば、私の歌が聞こえる。そうすれば分かる……。分かり合える……！」

自分と同じに、同じ境遇になれば、全て一つになれば分かり合えるって考えだろう。押し付けられる方に見れば、たまったもんじやない。というか、頭が回らない。歌のせいだ。うっとうしいほどに頭をかき乱す。苦しい。今すぐ楽になりたい。そうだ、意識を手放せばいい。

賛美歌を子守歌に意識を鎮めようとした瞬間、

“——たすけて、ジョウ、カ”

鼓膜に張り付いた声。それが、頭の中でリフレインする。

少女は此方をうかがう。間近で見るとこれはこれで将来が楽しみな顔立ちをしている。——しかし、それを見ることは叶わないだろう。結果はどうあれ、少女は長くない。

だが——そんな事は今になっては本当にどうでもいい。

「ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい」

「うるせえ。…黙ってる。ガキが」

ホントに、もう十分だ。コイツの言い分はイヤってほどに分かった。ただ、理解するつもりも、同情するつもりも、我慢するつもりもない。

「自分に非があるってわかっていて、自分が悪いなんて思っていない奴が簡単に謝ってんじゃねえ。そもそも、その謝罪で自分を正当化しようとするな」

「え……………」

前にもこんなバカが居たっけな。まあ、あの時も、何とか助けられるかも、なんて思って動いたけど結局ダメだったワケだし。やっぱアレだ。Errorはerrorでしかないんだよね、これが。

「…………お兄さん、髪の毛、色が」

「ああ。お前を見ていると思い出しちゃうよ。クソッ、せっかく忘れてたのに。——ああ、もう、イラつく。本当にイラつくよ、おまえ」

なりふり構わず、悪態をつく。手助けしたerrorもそうだが、それに頼ったerrorもひどいものだ。

「——クソガキ。いいか、おまえは声を出せないだけ。ただ、他とは少し違って一つ欠けただけだ。なのに、おまえはその零した一つに執着して、自分に残ったモノに目が行かなかっただけの事だろうが。分を弁えろって。いろんなモノ持つてるやつがコツチに来る必要ねえ。ハッキリ言っ、邪魔なだけだ」

「ちが、違う、違う、そんなの違う……！ 私には歌しかないの…

…！歌いだけなの……！今までもそうだったし、これからもう歩いていくの……！そののどこが悪いっていうの……？」

「あ？だから、それが悪いって言ってんだよ。これだけ言っても気づかないの？いいか、人間ってのはいろんなモノを持って生まれてくる。…まあ、生きていく過程で一部失ったり、全部無くなることもあるだろうが、一つしか持っていない人なんていやしねえんだよ」

いろんなモノを持って生まれ、それに気づき、それを生かせるのが強者であって、気づけないから弱者が生まれるのだ。そもそも、そんな何も持たずに生まれたヤツがいるのなら、もうそいつは人間として、

「ああ、確かにおまえは失った。おまえからすれば、全てを失ったんだろうよ。でも——なら、どうしてお前は、まだ、そうして生きてんのさ？」

「…え、…………ア？」

そう、生きている。

もし、本当にすべてを失ったと言うなら生きていたいと思わない。生きてさえいないだろう。だが、それでも生きている。なら、その失ったものを誇りに生きる。それすら認めず、気づかず、捨てたというのなら、生きる価値などない。

「その窓から飛び降りれば、そんな悩まず、苦しむこともないっていうのにな……。確かに死は怖ろしく、恐いものだ。だから、おまえは自ら命を絶つことが出来ず、他人を自分と同じ位置にして一緒に死んでくれる、自身の死の恐怖を和らげてくれる人間を。つまり、道ずれが欲しいと願ったんだろ？ そんなのまっとうな人間がする事じゃない。それじゃどうやったって救われない」

「……………うるさい。うるさいうるさいうるさい……………！ 何も失ってない、何も知らない奴が偉そうに！だまれ……………！」

激怒する。頭を抱え、苛立ちを露わにし言葉を失ったerrorは、俺に向かって物を投げつける。

「私は歌いたいただけ、歌って、想いを、気持ちを形にすることは悪い事じゃない……………！みんなに歌を聴かせて、それが形になった時、ようやく私は救われるのに、ねえ、どうして……………！ どうして、そんなこと言うの……………！！！」

ただ、俺の体に纏わりつくだけだったモノが急激に敵意に変わり、俺の頭の中に入り込もうとして、

「——いや、なに。勝手に人の抱えてるものに、おまえはちょっと出しやがった——」

問答無用に。肌に纏わりつくモノを、払いのけるために、

「その気持ち、おまえにも教えてやろうと思ってさ」

自身の腕に噛みついた。

ごりごり。と噛みついた箇所からいい音がする。腕から口を離すと景気よく腕から流れる血液。その勢いは止まらず、床に血溜まりが出来る。ここまでやる必要はないが、まあ、文字通り出血大サービスだ。

「っ……………」

腕から痛みが走る。尋常ではない。さっきまで変な歌で頭の中をシエイクされていた事を考えれば、卒倒ものだ。

でも、意識を失わなかったことは幸い。せつかく、心が体に追いつきそうなんだ。久しぶりの現実を味わいたい。

「…は。ははは」

——イタイ。

掻き混ぜられた頭が痛い。世界を見る眼球が痛い。乱れていく呼吸が痛い。

そして何より、噛みついた手首が痛い。

腕から頭に響く激痛。それにより、脳みそがトロけそうなほど麻痺している。

しかし、自身の中を占めているのは、湧き上がる高揚感と心の底からの喜び。笑える。

「……ははは、ハハハハハハハハハ」

周りにいる不愉快なモノを振り払う。振り払った物体は、より明確な敵意を発してくる。

「…………ケヒッ」

追いつく。五年のブランクを修正して、心と体が一体化する。どく。どく。と心に血液が回る。冷めていた心と欠陥品の体に神経が繋がり、定着する。他人の体がようやく自分のものになる。

いつもながらいいね、これ。マジ、最高にハイってやつだよ。俺、今サイコーに充実してるし、やっぱ、他人のより自分のだよ。生身サイコー！

「…い、や。…なんなのよお、こいつ！」

震える手で近くの引き出しから果物ナイフを手に取り、こちらに向ける少女。

構わず、少女に一步踏み出す。

「こ、こないでえ！」

さくつと腹部に突き刺さるナイフ。

「おいおい。紙とさえ言われる俺の防御力だ。…もちつと手加減しろよ」

「っ…………。…なんで、…なんでそんな平気なのよお」

ナイフから手を離して後ずさる少女。

やっべー。なにこれ、腹刺されたのに何かすげえ笑えるんですけど。

「あ——は、は……は……は？　そ、そっかあ、お兄さんも私と同じ、なんだ、ね？」

震える体を抑えつけて、こちらへ近寄ってくる少女。先ほどまであった狂気は感じられない。あるのは、怯えたような歓喜。

「探してた。探し続けてた。私と同じ人。ようやく見つけた、仲間を——」

仲間を見つけた喜びなのか、こちらに震える手を伸ばす。皮と骨。その手は、白く細い枝のように見える。

「懐くな、鬱陶しい。形が似てるからって、同じ生き物なんて言わないでほしい」

ほんと、こいつも学習能力ないね。

伸ばされた手を払い、漂うモノに意識を向ける。

「えっ……………」

——さあ、そのしがらみ全部捨ててもらおうよ。

「え、う……………？」

白は赤へ。

目の前の少女の白い肌が赤く染まる。よく見てみれば、右腕部分の服は真っ赤。

「え——いあ、た、あ……………！？」

浸食する赤。疼くように突き抜ける痛み。あらゆるモノが流れ出ていく。少女にとって、おそらく、一度経験している事。自身の全てが無くなっていくような感覚。

「や……………いやあ、嫌アああああああ……………！！！」

絶望があがる。悲鳴とも絶叫ともとれる声に、いつもの如く高まる自身の感情。

状況は、見ようによっては悪化。与えようとした者が次々失っていく。

「ああああああ……！！どうして。どうして。どうして……！！！！」

手元からこぼれていく。その落ちたモノを拾おうと視線を床へ向けたが、そこで、ようやくもう一つの赤に気がついた。

「なに、これ……！？ 嫌あ、嫌あ、嫌あ……！！ 崩れてる、私崩れてくう……！！」

腹部から広がる赤。声を失った少女は、残っていたモノが無くなっていく事に戸惑っている。それでもなんとか落ちたモノを拾おうと必死に手を動かす。

本来ならその落ちていくモノは見えている以上、触れて掬うことが出来る。だが――

「なんでっ！なんで落ちていくの、私のモノなのに、なんで拾えないの……！！！！」

今更、無意味だ。

それが自身からあふれ出たモノでも、ソレはもとより捨てたモノであり、ようやく気づいたところで、それは自分には無いと決めつけたモノだ。歌うことで、一つの事柄でしか自身を保てないなど所詮、失ったことを認めれない人間的な弱さだ。そんな人間性が残っていないくせに、こんなヤツらに補ってもらおうなど、人間がやっていい

事ではない。

だって、ほら。普通、人間は他の人間の手によって救われるんだから。

「なんなのよお、こんなの、おかしい……？！ 同じ人間なのに全然私と違う……！」

「だから一緒にすんな。おまえはerrorっていうカテゴリー。それで、俺は」

また、嫌なことを思い出す。忘れたかったが、覚えている。

マワリさん曰く、

「世界を構成する八番目の元素を持つかもしれない、なんとからしい」

噛みついた血だらけの右手。ナイフで刺された腹部。

同じ個所から血を流す少女だが、あれは色は赤でも血液ではない。形のない少女の持ち物。生まれた時、平等で不平等に与えられた人間性を構成するモノ。

だから、あれだけ流れ出しても殺すことは出来ない。まあ、でも、あれはあれで人間やるための血液みたいなもんだから、全部無

くなったどうなるかは別問題だが。

「やだ、やだよ、たすけてよお……！ 苦しみたくないのに、苦しいのいらなにのに、苦しまないようにやってきたのに、なんでこんな苦しいの……？！」

失うことを恐れ、苦しみから解放されるために失ったモノを取り戻そうとした。しかし、それは引き止めることも出来ず、零れ落ちていく。

「もう、こんな思いしたくないのに、こんな気持ちいらなにのに、どうして、どうして……！」

彼女にとって、もう、ないと思っていた二度目の体験。

「たすけて、たすけてよお……！ 私は歌いたただけなの、歌い続けていたただけなの、歌うのが好きなの、大好きなの、歌を聴いてくれる人も好きなの、大好きなの……！！ ……だから、お兄さんも聴いてくれるなら好きになるから、大好きになるから……！！！」

「うん。気持ちだけ受け取っとく」

悲痛なまでに流す涙。目は焦点が定まらず、だらしなく口元から垂

らす涎。這うように、獣の体勢でこちらに向かってくる様は艶美^{えんぴ}。

「いやあ……違う、違う！あなたは一緒に歌い続けるの、ずっと一緒に聴いてくれるの……！あなたならずっと聴いてくれる、死んでも聴いてくれる、……ううん、いつまでも一緒、いつまでも好き、いつまでも大好きでいられる、私が死んでも歌い続ける、あなたが死んだら、あなたを思って歌い続ける……！！ねえ、ねええ、いまでも私の事好きにしていだから、これから私の体好きに使っていいから……！！！！ねえ、だから——」

ああ——こんな断末魔に似た台詞聞いたら、

「それは随分とそそられるお誘いだな。確かになかなかの美人ちゃんになりそうな顔してるよ」

「でしょ……！そうでしょ……！！！」

ホント、もう、

「でも、その前にさあ」

我慢できないほど、

「俺、——歌って嫌いなんだよね」

嫌になる。

「——、あ——」

涙に埋もれた瞳が、呆然とこちらを見る。

少女の最後の赤いしずくが一滴がこぼれる前に、今まで耐えに耐えていた自身の意識を失わせる。——バイバイ、現実。

夢に起きる。

どれだけ、気を失っていたのか。視界には病室の天井が見える。窓の外を見てみると、いまだ暗闇が広がっていた。とりあえず、そんな長くは寝ていたワケではないようだ。

覚醒しきっていない意識の中で、自分の状況を確認する。いつも通りの感覚。——よし、異常ありだが、異常なし。体は正常に稼働中。^{いじょう}

むくつと起き上がる——起き上がろうとした。

腹部からヒドイ痛みが走る。

そうだ、俺刺されたんだった。しかも、まだ刺さってるし。

幸い、深く刺さっていなかったが、普段着である作務衣は噛みついた腕部分と腹部は血で染まり、刺された箇所^{いしよ}に穴が開いてしまっている。

上体を起こす。よく見れば、この部屋も殺人現場のようなスプラッタな現状になっている。

「やば。早く、ここから退散しないと」

腹部の痛みはキツいが我慢できる範囲。出血の方は止まっているが、動いたら開きそうだな。まあ、腕の方は大丈夫そうだし、腹は押さえていれば何とかなるだろう。

「おや、もう起きたのですか。いや、まさにゴキブリ並みの生命力と、いったところでしょうか」

「……………」

出来ることなら振り返りたくない。振り返れば見たくもない現実が怖い。

「しかし、いくら常夏くんとはいえ、そのキズでは少々きつそうですね。……ふむ。では、後の事は気にしないでそのまま寝てください。ちゃんと処理の方は私の方でやっておきますから。もちろん、きみの処理の方も……」

シャキッとすぐさま立ち上がる。

危ない。何が危ないかっていうのは、この人に自分の事を任せたら刑事ドラマでよく見る現場検証のように証拠物件Aとして、さつきまで倒れていた通りにテープで囲まれていたに違いがないからだ。もちろん、俺は死体として。

「どもっす。なんとも、お早いご登場なことだ」

「ええ。きみがあんまり急かすもんだから、一時間も掛からずに着いてしまいましたよ」

O H。マジでかつ飛ばしてきやがったよ、この人。

「いや、一時間かかんないとか、なにやったんですか？ 隣町に居たはずなのにありえねえって。街中じゃなくても戻って来るのに一時間は掛かるはずですよ？」

「常夏くん。きみが規則を破ってでも急げって言いましたからね。とりあえず、国家権力の方を行使してみました」

凄いなあ、気のせいじゃなく、本気で眩暈がする。

「…一応聞きますけど、——どんな？」

待ってましたと、口角を吊り上げるマワリさん。

「それは、もちろん。誰しもが憧れ、一度はやってみたと願う、救急車を、あの走る法律をサイレン流しながら、規則など無視して走行する事ですけど、…いや、本気で移動時の足にしましたよ」

無邪氣に、子供ように話す変態。あはは、——誰だよ、コイツに
国家権力^{おもちゃ}なんか与えたのは。

「…もう、いいです。それじゃ俺はこれで。ゴタゴタする前に退散
します」

「そうですね、その方が良さそうですね。——あ、ちょっと常夏
くん。時間は何時でもいいですから、明日、私の家に来てください
ね」

とりあえず承諾。今はこの場から離れたい。こんな所に居たら、い
ろいろ複雑に深く考えて面倒なことに答えが行きそうなんでマジパ
ス。まあ、その辺の折り合いは、まだ、ついていない自分な訳で。

その日、帰り道は遠回りの道を選んだ。

本当は、今すぐに何かを入れたいほど、無性に腹は減っている。そ

ういえば、昼から何も食べていない。

ダメだな。生きている以上、何か食べないといけないというのに。

どれだけ歩いたのか。

見飽きた夜空から視線を外すと、程なくして、月明かりで出来た丸い影が落ちているのに気がついた。

もう一度、夜空を仰ぐ。

視界いっぱい青みかかった夜空が飛び込む。

もうすぐ、夜明け。

なんの変哲のない空。

赤い月を背景に浮かび上がる、噂の種。

「なんだ、まだ飛んでるじゃん」

そうして、種は赤い月の不気味さにもたれるように漂っていった。

つけっぱなしだったのか、テレビの音がうるさいので、仕方がなく起きることにした。

…瞼がすごく重い。まだ、体は睡眠を欲しているみたいだ。それでも、テレビから流れるニュースを聞く限り、どうやら時刻は朝だとわかってしまった。寝すぎるのは良くないと思い、なんとか意識をハッキリさせようと活動してみる。

確か、昨日は昼過ぎに起きて、食事を取ってからまた寝てしまったから、二十時間くらいは寝ていたはずだ。

ベッドから起き上がる。窓の外を見ると少し明るい位の暗さ。

まだ、青さが残る空をぼうっと見ていると部屋の戸が開く音がした。振り返れば、ジヨウカはお持ち帰りしたのか、片手にはジャンクフードの袋を持ち、もう片方でハンバーガーを貪っていた。

ジヨウカは相変わらず、作務衣をだらりと着ている。

なんとも似合わない光景である。ジヨウカが作務衣を普段着にしている事やジャンクフードが好きなのは知っているが、この組み合わせは日本文化に対しての冒涇ではないのか。

もともと、この光景は幾度となく、見えてきて慣れてしまっているが、それでも許しがたい。そんな私の事を知っているはずなのに、

「ハロー、アンリ。ご機嫌いかが？」

…これである。この軟派な態度と口調は、…いや、もういい、いつもの事だ。…と、ジャンクフードを持つ右手に包帯を巻かれている事に気づいた。

「おはようございます、ジヨウカ。体調は、まだ少し眠気はありませんが、それ以外は問題ありません」

「？ おまえ、意外と頑丈なんだな。昨日あんな事あったのに」

「……………」

確か、昼にジョウカが帰ってきた時以外は眠っていた。ジョウカが帰ってきた時も特になかったはずだ。

「…いや、なんでもない、気にするな。単なる戯言だ」

そう、言つとジョウカは、ボスンツとソファーにもたれる。

なにか不満そうな顔をするジョウカ。…気になることを言うが、追及はしない。こういう時のジョウカは何を言っても返事が返ってこないのは、この二年の付き合いでよく理解している。

しかし、昨日は私が眠っている間に何かあったのだろうか。私はあの噂を聞いてから体調を崩して寝込んでいたから、ほとんど知らない。

…いや、それよりも問い質さなければいけない事がある。

「それで、ジヨウカ。その右手ですが、どうしました？」

「ん？ ああ、これね。なに、ただコケて擦り剥いただけだ」

もちろん、そんな理由ではないとわかっている。ジヨウカもそのことをわかって言っている……と思う。が、そんな事どうでもいい、といった感じに別の話題を振ってきた。

「それより、おまえ腹減ってないか？ 俺の知る限り、昨日から何も食ってないだろう？」

…確かに寝ているだけとはいえ、かなりお腹が減っている。——しかし、ここで話を逸らされたら、なぜか負けだと感じる。それだけは嫌なので、ここは確固たる決意で問い質せねば。

「空いていますけど、今は私の質問が先です。——それで、その腕は本当のところ」

「ああ、そうそう。冷蔵庫に竹屋の団子があったはずだけど、どうする？」

やけに、最後の辺りが強調されている気がする、ジヨウカ。…今なら、人質を取られた人の気持ちがわかる気がする。

「っ…………たべます」

そうか、と薄く笑う、ジョウカ。

あれは、私の単純さを笑っているに違いない。

「あいよ」

渡された串団子は、間違いなく竹屋のもだった。普段はだらだらしているくせに、用意周到なことだ。…まあ、モノにつられる私が言えた事ではない。

妬ましいと串団子を睨みつけながら、一口。

先ほど感じていた感情はどこかへ行ってしまった。…ホント、単純だ。

結局の所、あの腕の包帯はトオノマワリから回ってきた仕事の時に負った傷だと、ジョウカは話した。

トオノマワリとジョウカは、血縁関係は全くないが、書類上ではトオノマワリがジョウカの保護者という事になっているらしい。

高校を中退したジョウカは職に就かず、ゴロゴロと過ごしていた。あまりにも社会的に体裁が悪い、それを見たトオノマワリは保護者という立場を使い、自分の仕事を回している。本人は、なんで俺が？な感じで嫌々といった所で。しかし、それでも辞める事が出来ないように。

NOと言えない日本人らしく、サラリーしますか、との事。…私から言わせれば、首輪に繋がった犬にしか見えない。

久しぶりにお風呂を満喫した。体調を崩している時は、ジョウカに止められ、入ることが出来なかったが、治ったなら自重する必要はない。

「おまえ、本当に外人？日本混ぜってね？」

そんな事を言われても、一切日本人の血は入っていない。

「混ぜっていません。その事に関してはトオノマワリが調べて、あなたも知っている事では？」

「ああ、あれね。いや、あの時は、マワリさんのふざけた情報収集の方が印象強くて忘れてた。」

…確かに、あれは酷かった。日本には個人情報保護する習慣は無いかと、さえ、思ってしまった。

「まあ、日本人じゃない事は分かっているけど、おまえのその趣向を考えると言いたくなる。切実に」

「？私、何かおかしいのですか？」

言葉の方は怪しいが、特に変な行動はしていないはず。たぶん。

頭を捻りながら何やら考え中名ジョウカ。と、なにか閃いたようで、

「……………ハ！前世あたり日本人だったのではないのか汝？」

…いきなり、何を言い出すかと思えば、しょうもない事を言う。そんなわかりもしない、現実味のない事を言われても困る。

「…仮にそうだとしても、私は私です。過去の事に影響されて私という人間が生まれたなんて、他人の体みたいで嫌です。そもそも、

そんなこと認めません」

「うわ、なに全否定してんの。ありえない話じゃないだろ？」

ありえない話って……。それでは、いくら正しく立派な人物だとしても、それは過去の自身の影響があつてそうなったワケで、自分自身ではないと言えないだろうか。極論ではあるが、私にはそう思えてしまう。どんなに無様で間違いだらけな人生だったとしても、前世なんてモノに影響されず、その過ちを正してくこそが人間の取るべき道だと考えている。

…けど、皆が皆そう考えているとは思っていないし、そうではないと理解している。今の自分にしたって、誇れるような事をしているワケでもないし、偉そうなことは言えない。そうやっていける明確なビジョンは、もう、ない。

だから。さっき言ったことは私に残った最後の意地だ。

「……まあ、人それぞれって事なんだろうな」

こちらの考えは見据えたように曖昧な答えで纏めると、ジョウカはため息に似た息を吐き出す。

それは、呆れから来るものなのか、表情は読み取れない。ただ、言葉にほんの少しの温もりを感じた。

…なんだろう。今日はやられっぱなしだ。

わかっているが、今のままでは、反撃のチャンスはない。でも、それはなんとなく癪に障るので少し反撃しようと思う。

ジョウカは、それを言われると起こりはしないが黙ってしまう、という泣き所がある。それは、今の私としての本心でもあるのだが、ジョウカは聞き入れてくれないだろう。

「そうですね。同じ人間なんていませんからね。ですから、ジョウカ」

目線だけをこちらに向けるジョウカに、目を合わせて話す。

「自分を御自愛ください。同じ人間や、ましてや変わりなんていない、上池ジョウカ。あなたは、私にとって、大切な友人なのですから」

「……………あー、まあ、善処する」

目に見えて嫌な顔をするジヨウカ。そして、逃げるように、マワリさんの所行ってくる、と言って部屋を出て行った。

今日もマワリさんの家へ向かった。ここ数日は毎日通っていたが、今回はマワリさんからの呼び出しだ。

おそらく、どんな顛末を迎えたのか、その後どのような処置になるのか。その説明会だろう。正直、後の事など興味が持てそうになかったが、やるなら最後までが信条なマワリさんだし。なにより、約束した以上、ここは大人しく顔を出す。

「まあ、そんな訳で、今話したのが今回の errors。……毎度思うけど、これって意味あるんですか？」

さつきから一方的に話している。マワリさんの用件は、やはり、昨日の経緯について説明を要求だった。噂を流す犯人、その元凶、事細かく説明している。

マワリさんはそれを黙って聞いているだけだが、目は、全て話せ、と言っているようなので丁寧に喋る。まあ、目だけであちらの意志が分かる辺り、十年間、マワリさんから受けた調教の賜物と言えよう。

「いえ、素晴らしく、充実したお話でしたよ。やはり、きみに語らせたら右に出る者はいない位に」

「だから、その言い方やめてください。マワリさんに褒められるとか、寒気以外感じないです。…つか、褒められてる気が全然しねえです」

「おやおや、偽りもなく本心で話したというのに。……まあいいでしょう。ただ、きみの説明を聞くと、今泉佳昌がどんなerrorだったのかはわかりましたが、どれだけ干渉出来るのか、生き物以外にも干渉は出来たのか分かりませんね。ああ、後ついでに今回も、最後までやらなかった理由もね」

いつもと違い、真顔で訪ねてくる。——厭な質問だ。あれは、確実に楽しんでやる。

「理由って、他人の人生を勝手に終わらせるのはどうかと思いますよ。いくら、残虐で非道であっても、それが自業自得であっても、他人の生き死に関与していい事じゃないと思いますよ。」

「ほう、あそこまでやっておいて、よくそんな事を考えましたね。……さすがと言いたい所ですが、常夏くん。きみが異能を使うのは、心と体のバランスが一致しなければいけないはずですが、あの時の身体状態でよく出来ましたね」

実際の所は、ただ気を失っただけなのだが、ここは黙ってることにしよう。あつちは何か勘違いしているようだし。

俺は、五年間を失うことで自身の実感を無くしてしまった。ただ、あの時は間違いなく自身の体だと実感できた。当たり前的事だが、この体は間違いなく俺の体だ。

仮に——仮にだが、この体はあの時の俺を表現するためのアタチメントだとするなら、また別の話だが——

「しかし、惜しいですね。もう少しでこちら側に来れたというのに、ギリギリで戻ってしまっんですから。まったく、あんなのを助けてしまうなんて、……いっそ、最後まで行けばいいのに」

こちら側とは、何を意味しているのかは分からない。碌な事ではない事は確かだろうが。

「……はあ、放っておいてください。あと、言っておきますけど、人助けなんてやってませんよ。マワリさんにはそう見えても、俺は単に面倒になっただけです。それ以外にあんなの助ける理由はない」

もう関わることをない少女を思い出す。

俺は errors に同情したのではない。ただ、あの姿を見て、そうする価値が無くなってしまったと感じただけだ。ゼロか一かの話である。

俺は俺の日常を守るために errors と対峙しただけだ。

普通、人間ってのは変化を嫌う生き物なんだ。変革の先により良い未来があるとしても、今見える不変を取ってしまう。俺は、そのまっとうな人間らしく、それを選んだに過ぎないと思う。

「そうですか。きみは今泉佳昌に情けを感じたのではなく、自分を優先したのですね。いや、よかった。もし、同情なんて感情で殺さなかったのなら常夏くんを嫌っていたところですよ」

それだけでなく、アンタは俺を嫌っているだろうけどな。

「では、その事については以上です。次は彼女についてですが、まず、これに目を通してくれませんか？」

スツと、資料を渡される。見れば、小学生くらいの少女の写真が貼られている履歴書のようなものだった。それには、病魔に侵される前の写真と経歴がつつらと書かれている。

「それにしても——あの子は、なんでこんな事をしたんでしょうね」

「そりゃあ、声を失った事が原因でしょ」

「？それはおかしいです。彼女は話すことができますよ」

「……………はあ？」

「おやおや、直接会ったきみがそんな——ああ、そうか。常夏くんは根本的な所で勘違いしているんです。確かに病気によって声帯に異常が出ましたけど、声そのものは失っていないですよ」

もう一度、資料に目を通す。……………おかしい。

確かに、影響は出たとは書いているが、声を失ったとは一切明記されていない。

「……どういう事だ、これ？確かにアイツは」

口を動かさず、直接こちらの頭に話しかけてきた。

「おや？興味なかったはずでは？」

「興味じゃなくて、間違いを探してるだけです」

改めて資料に目を通す。

今泉佳昌^{いまい かしょう}は去年まで歌手として活動していた。期待の新人、だったのだろう。全国で営業に回りながら、歌のレッスンをこなす日々。しかし、いや、だからこそ、このような結果を招いたのかもしれない。

多忙な日々を送る毎日の中、ある日、高い熱と節々の関節の痛みを訴えた。その頃は単なる風邪か何かと思われ、何日か休養をして、その時は体調も回復したため、誰も気にもしなかった。だが、それから何度か同じような症状を訴えては休み、何日か経てば治るを繰り返し続けた。周りの人たちもさすがに何かあるのではと考え、病院へ行くことを進め、少女もそれに従い病院で検査を行った。結果、慢性扁桃炎が原因で体中に弊害が出ていると判明した。

治療法は、薬物によって症状を和らげるか、手術による扁桃の一部摘出だと、彼女にとってあまりにも酷な事が医師から告げられる。

「彼女のかかった扁桃炎、正確に言えば扁桃病巣感染症は小児期に多くみられ、女性が起こしやすいと言われています。彼女の場合、扁桃を摘出することで完治できたのですが」

言うまでもない。歌手である少女がそんな事を認めるはずがない。認めることは歌手としての生命線を立つのと同義。

「薬物投与による改善を希望したようでしてね。いえ——そもそも、薬とは治すことが目的ではなく、和らげる事が本来正しい」

完治は不可能。それでも彼女は薬による完治を望んだ。医師達や周りの人間からも説得されたことだろう。

——絶望的だ。可能性はゼロに等しい。奇跡を待つものだ

『——それでも、希望はある。ゼロじゃない。奇跡は起こる』

諦めることが出来ず、必死にもがいていく少女。まだ、小さく弱々しく見える命。^{おもひ}ただ、あの病室で歌っていた後姿は未だ輝いていた。

「それを理解してなお、手術だけは拒み続けた。——結果だけ言
ってしまえば、その後、行われた薬物治療はほとんど効果はなかつ
た。炎症を起こしていた扁桃は腫れ上がり、呼吸困難まではいかな
かったようですが、声を出すことは多少の影響は出たようです」

「——あ。もしかして、今泉佳昌が喋らなかったのは」

マワリさんは語る。人には一人一人、他人には分からない感覚を持
っているものだ。少女にとって、いくら、声が出せたところで昔
のような歌声を歌い続けられることが出来なくなってしまうえば、意味
はない。それが、他人からしてみれば些細な変化でもあっても。

だから errors なんてモノになった。幼いながらも歌手として
のプロ意識があった今泉佳昌にとって今までのように声が出ないな
んて失ったも同じ。

「そのまさかです。よ常夏くん。扁桃炎が原因で声が出さなくなつた
今泉さんは、ひたすら治ることを信じて治療を続けなければならな
かった。手術でしか治る見込みがない扁桃炎患者。歌手である今泉
さんにとってこの上ない地獄。その果てにあのような妖怪にとりつ
かれた」

やまびこ
山彦。

あの少女にとりついた妖怪、精霊でもある山の神。また、樹木の霊『木霊』^{こだま}とも呼ぶ。

一般的には山や谷の斜面に音を発した時、それが反響して送れて返ってくる現象を山彦と呼ぶ。

伝承によれば、山中に住む呼子^{よこい}という者が、山彦の声を発すると考えられ、昼夜問わず深山で突然恐ろしい声が聞こえる怪異を山彦と呼ばれた。ほかにも？（やまこ）と呼ばれる妖怪と同一視されることもあり、木の霊が山彦を起こすと考えられたことから、中国に伝わる木の中に住んでいる精霊の彭侯^{ほうこう}とも同一視された。

ただ、これだけ各地に様々な伝承として残っているが、根本的な部分ではほとんど同じ。それは――なにかを反響し“伝える”ことだ。

「歌手とは歌を通して自身の気持ちを伝えられるのら、この能力を使えば、声を出す必要もなく歌を伝えることができる。そうして、彼女の歌は噂となって流された。彼女にとってこの上の無い幸福だったでしょう。しかし、その頃には彼女の体は完全に病魔に蝕まれていた。腎不全を起こしていたのです、それも末期段階の。長い闘病生活と大量の薬物摂取によって彼女の体力は限界で移植手術も行えず、透析によってなんとか延命していた。それでも、彼女には希望があった。街に流した歌を誰かが聞いてくれると」

ただ死ぬのではなく、歌手として死にたかった。今泉佳昌という歌手がいたと証明したかった。歌を聴いて自分に会いに来てほしかった。

た。

しかし、その思いが届くことはなかった。誰も会いに来てくれなかった。時間の無い少女は焦ったことだろう。明日には死んでしまいかもしれない自分。その死の恐怖の果て、狂った妄想にとりつかれた。つまり——みんな同じになってしまえば思いはみんな一緒になる。

もう、歌なんて関係ない。むしろ、どんな形でもいいから思いを通じ合えば、今泉佳昌にとって救われる最後の希望。だが、同じ境遇がそうそういるワケでもない。少なくとも、あの病院にはそんな人間は存在しなかった。

だから——探すのではなく、全く知らない他人を自分と同じにして、同じ人間同士で救いを求めたかったのだろう。

「了解。納得いきました。けどまあ、それって自分のせいですよね。だって、生き方さえ変えてしまえば済む話なんだから」

資料を返すと、なぜかため息をつくマワリさん。なにやら呆れた感じである。何に対してそう感じているのかは知らんが、目の前でそんな事をされてはこちらもいい気分ではない。

「わかりました。疑問に思っていたところが明確になったので私からは特にありませんけど、後、なにかありますか？無いなら帰ってもらえると助かります」

「え、もう？来たばかりじゃないですか。もう少しマズイ珈琲を啜ってたいのに」

「……珍しく気持ちの悪いことを言ってくれますね。もう用済みなんで、黙って帰ってください」

……なんだか今日はやけに余裕というかいつもの調子ではないマワリさん。あまりにも珍しいので余計にも絡んでみたいと思うが、後が怖そうなので今回は退散した方が吉。

「わかりました。でも、そっちも珍しくかまってオーラ出てませんね。これから何か用事でもあるんですか？」

「……何もないです。しいて理由を述べるのなら、今日はもう常夏く

んの顔を見たくないだけです」

「……………」

…機嫌が悪いのはどうやら俺が関係しているようだ。何かしたっけ？

「気づいていないのならそれでいいです。きみにそれ以上を求めるのは馬鹿がすることだと実感してますから…。ああ、勘違いしないでください。常夏くん。きみはそのままでもいい」

…むむむ。本気でわからない。呆れられていることもそうだが、マワリさんが不機嫌になる理由もさっぱり見当がつかない。

「別に馬鹿にしているワケでもない。ただ——きみは変わらない方がいい、と言いたいのです」

…つまるところ、無駄な努力などせず、今まで通り良いように使われているって言いたいのだろう。…言いたいことはあるが、首輪に繋がれている事は確かなため反論できない。

「了解。んじゃあ、またなにかあったら来ます」

「はい。それではまた」

パイプ椅子から立ち上がり、振り返ることなく中庭から立ち去る。

楽園から抜け出す。

形態の液晶に目を向ける。時刻は午前十時を過ぎたところ。

昼まで二時間ある。

——さて。時間を弄ぶのもなんだし、なにかして時間を潰そう。
本当は暇な時間は歓迎すべき体質の俺だが、今はそんな時間は
ない。半端な人間には正直やってらんない。

自宅を目指しながら携帯を取り出し、まだ寝ているだろう友人を呼
びだす。

「あー、もしもし？ 起きてくるか？ そうか、なら暇だからカラ
オケ行こう。………はあ？ 行ったことない？ 知らない？ ……なるほ
ど、ならばおまえにまだ知らない日本の文化があることを教えてや
ろう」

気分は悪いが、よく考えてみればこういうのも悪くないと思う。

／二〇〇七年 十月

(6・5)

上池常夏はそう言つて病室を後にする。彼が去つた事から気が緩んだのか、背後で倒れている少女が起きたことに一瞬、遅れて気がつく。

ほんの一瞬の油断。油断していた。あれだけやられてまともに動けるはずがない。些細な気まぐれのようなもの。

急いで体の正面を少女に向ける。ほどなくしてカシャーンと金属音が床から響く。

病室に周りに真新しくついていた血痕を上乗せするように赤から朱へ。

——やられた。

普段ではありえないような油断。自身がerrors相手に絶対にしてはならないはずの行為。当たり前で一番に重要な事。

「——チツ。油断した私が悪いのですが、あなたは、あなたで潔すぎますよ」

物凄い勢いで流れる血液。

「まったく性急なことだ。そう長くないからといって今死んでもらっては困る」

結果は決まっているから、今出しても問題ないと見たか。実にその通りだが、しかし、それではここに来た意味がない。素直に話してくれるとは思っていなかったが、これでは後味悪い。

「まあ、いいです。…だが、せめて質問くらいは答えてください」

視線の先の少女はなぜか今にも倒れそうなほど不安定。明瞭だ。少女の細い腕からは真っ赤な血が流れているのだから。

「なぜ——いまさら自殺なんてしようと思ったのです?」

ついさっきまで床に落ちていた果物ナイフで自らの腕を搔つ捌いていた。

少女は虚ろな目でこちらを見るだけで質問には答えない。――まあ、今さら自殺を図るのだ。理由なんてもうないのかもしれない。

「……そうか。そうですね、そこまで考えれるような状態ではないですね。ご苦労さま、もういいですよ。後の事は私がちゃんとやっておきますから――ああ、すっかり、あなたという人間がいたと記録には残りますから」

安心して少女に語りかけると、満足したように床へ崩れていった。

そうして、眠るように倒れた少女の顔は資料で見た一年前の顔そのものだった。

「……なんとも。最後の最後に人間らしくなったところで意味なんてありそうもないのに」

だが、もう彼女にとってその意味はどうでもいいのかもしれない。

だって、それよりも、失ったモノへの価値を見出せたのだから。

これは、正月過ぎのこと。ようやく停学期間が終わったころ、このままドロップアウトしようかと悩んでいる時のことだ。

俺は時間つぶしと自分の習性のため、ビル街にある公園へお邪魔していた。お月様がよく見える夜の七時。

まあ、ほんとだね。駅前にいる女の子でも引っかけて、アバンチュールな一夜を過ごそうとしたのですけどね。見事に玉砕、というより粉砕な訳ですよ、おもに心が。：慣れないことはやるものではないな。そんな状態だ。さっさと帰って寝てしまおうと思ったのだが、考え事をしていたせいだ。公園に足を運んでいた。

もともと、十字交差点があつた場所に作られた大暮市内にあるちょっと変わった公園である。

その中心にあるベンチには草臥れたスーツ姿の中年。

ふと、思い出す。

去年の終わり頃、この公園で事件があった。通報を受けたのは最寄りの交番にいる新人のお巡りさん。時間は十時過ぎ。

「今からちょっと、じゃれ合っから街中の公園に人を近づけないでほしい。後、片づけもお願い」

悪戯にしか思えない冗談だ。そう思ったお巡りさんは見回りついでに公園に向かった。結果、消息不明。次の日、同僚を探しに行ったお巡りさんの報告により事件として報じられることになった。

「待ち人がいるのだ」

その人は、ぼんやりと座り込んでいる。俺は、日常的に他人（その人）に声を掛けた。知らない人には声をかけてはいけない。そんな小学生でも知っている事を俺は日常的に行っている。話せば面白そうなワケでもなく、しないといけないと訳でもない。けど、止められない。……いや、辞めれない、という方が正しい。

その行為によって色々厄介ごとに巻き込まれたことも一度や二度ではすまない。最近では、命の危険さえ感じてしまうほどで、治そうと努力をしている。

けど、習慣というのは恐ろしいもので。——例えるなら家に帰ってきて暗いために明かりのスイッチを探すあれだ。誰しもが行う生活する行動の中の一部。つまり、スイッチを探して押すのも、いましていることも自身にとって何ら変わりもしない日常的な（の）ことだと感じてしまっている。

そんな訳で気づけばこうして声を掛けてしまった。

「いつ来るの？」

いつだろう？と、逆に笑いながら質問を質問で返してくる。……まあ、こんな所に座っているような奴に普通の会話を求めるだけ無駄だな。そもそも、俺はこの会話に何を求めている。

男の話から察するに、その待ち人とやらと待ち合わせの約束をしていなかったようだ。……いや、これでは本末転倒ではないか。本来、過程（約束）があるから結果（待ち人）が来るものであって、決して結果だけが来るようには出来ていない。あるはずの無い商品を「買いましたよ」、と言っているようなものだ。

でも、この男は

「それって約束できるものなのかなあ？」

なんて言い出しやがる。

夜の公園でいかにもって奴に声を掛ける自分もだけど、こいつも相
当なものだと思う。……どうしよう。自分はそこまで話が上手い方
ではなく、どちらか、というより完全に口下手である。よく、黙っ
ても話してもダメだね、って言われるほどだ。……あれ？おかしい
ぞ。…まあ、どっちにしてもダメな訳で。こんな変な男と話をした
いなどでは断じて違う。

ふと、背広男が声を上げる。

「お疲れ様、ようやく来てくれたね」

ちょうど、俺の背後。背広男はそこに視線を向け、そう言葉を投げ
かける。

「――」

意識が、凍った。

振り返れば、この場にはあまりにも似合わない女が立っていたのだ

／二〇〇六年 一月末

どうしようもなく曖昧で、とても鮮明な夢。今にも記憶から消えてしまいうたのに、脳に焼きつくような映像。

ハッキリした知性じぶんと虚ろな意識。晴れ晴れとした精神。それとは関係なく気怠いと感じる身体。何とも言えないこの中途半端な有り方。……… 実に、

「……俺らしい……」

目覚めた瞬間、虚ろな意識はどうしようもなく俺自身なのだと、呆気なく証明された。

ベッドから起き上がり、ため息を一つ。気分晴れやかとは言えない。理由はさっき見た夢のせいであるのは間違いないのだが、いかなせん。悪い夢とは思えないし、いい夢とも断言できないのだ。

「…深く考えても仕方がないか。どうせ、夢なんだし」

シンと冷える空気を吸い、気分を切り替える。意識がはつきりしたところでベッドから立ち上がり部屋を出る。

部屋を出ると下の階から朝餉の匂いと器を並べる音が聞こえる。おそらく、後は盛り付けるだけで完了する段階だろう。

「…まいったなあ、昨日手伝うって約束してたのに」

午前七時前。

今から朝食の手伝いなんて、やれることは少ない。…仕方がないのでとりあえず顔を洗っていつも通り謝るしかないだろう。

トントン。リズムよく出来るだけ自然に音を小さくして階段を下りる。無駄な抵抗はあるが、体が勝手にそう動いてしまうが、本当に無駄な抵抗であった。

「くおら——っ！寝坊とはいいい度胸じゃない、アンタはっっ」

一階に降りた瞬間、台所のドアを破壊せんばかりの破壊音と怒声が

飛ぶ。

「昨日、あれだけのタンカきつておいて、毎度の如くこつも簡単に破るとはっ！我が弟ながら許せん！！」

と、片手には包丁を持ちながら此方に近づいてくる。…シャレにならん。

「ちょ……！待てって姉ちゃん！謝るから落ち着けっ！」

「待て、と言われて待つ人間がいますか——っ！！」

問答無用な我が姉。

このままでは、片方が刑務所行きで、もう片方がベッド行きなワケだが。それはつまり、お互い当分はシャバの空気を味わえなくなるという事であって、つまり——非常にまずいです。

「いいから落ち着けっ！そして、よく見ろ！お前が持つてるブツは人に向けていい物ではない！」

姉は何を言っているのか分からないように首を傾げる。刃渡り二十センチの包丁。何時だったか通販でまな板も切れてしまうほどの切れ味というキャッチフレーズに惹かれた姉が衝動的に買ってしまっ

た代物。あんなもので切られたらマグロの解体ショーならぬ、人体解体ショーになってしまう。

気づかぬ姉にその包丁を持つ右手を指さす。それでも気づかぬ姉は自身の手に視線を向けて、そこで握られているモノにようやく気づき、驚く。

「…え？ やだ、やだ、私いつの間にこんなモノ持ってたの！？」

信じられないー、と慌て騒ぐ姉。それでもバリバリの警部補。押しも押されぬ期待の新人。出世街道まっしぐらなキャリアウーマンで、来年には警部へ昇進するらしい。…というか、そんな正義の人間が無自覚で人を殺そうとしたのか。

この家には姉と弟である俺の二人だけが住んでいる。いや、二人となっているが、姉は休みの時にしか帰ってこないから、実際には俺一人だけでもある。

両親の方は、一年前にぼっくり逝ってしまい、残った俺たちはこんな感じで生活している。苦勞もそれなりに、行き詰る事はなかったが、今まで通りの生活とまでは行かないものの、そこまで大きな変化のない生活を送れていた。理由としては、姉がその頃には仕事に就いていたのだ。

しかし、いくらキャリアとして警察になったからと言って、若いうえに女の身で俺という足手まといがいる状況で普通に生活なんて出来るはずがない。最初は高校を辞めて働かないといけないなと思っていたのだが、そんな俺の考えを見透かしてか『弟の一人や二人どうという事はない』と言い放ち、今のようないろんな形になっている。

…姉ちゃんは知らないだろうけど、俺はすごくそれがイヤで仕方がない。わがままでしかないのだろうけど。

工県の沿岸最北の県境付近。

栄えているとは言えず、それでも田舎とは言えないような半端に便利な何かと不便な町である大暮という市がある。人口は約四万人。いくつかの観光名所があるが、いまいちパツとしない。駅から五キロも離れれば山や畑が広がる典型的な地方都市だ。

その駅を西から三キロも離れた所に小暮という場所がある。これといって特徴はない静かな住宅街。土地は余っているのだが、もともと田畑が広がっていた土地だった為、今でも半分近くは田畑が広がり、見た目ほど住宅街とも言えない。

しかも、建っている家は古く、築十年以上なんて当たり前な感じではつきり言って華がない。周りが山に囲まれているせいで季節によ

つては濃霧が発生する事もあって住みやすいとは言えない。

そんな小暮の中心、他の家より新しめな家が並ぶ番地がある。ただ、新しいとは言っても他と比べてであり、特に珍しくもない基本的な二階建ての家。

それが俺、かれのひな彼野比奈の住む、一キロ圏内にコンビニも自販機さえない閑静な住宅街だ。

今日はなんていうか俺にとっていい天気だ。太陽が雲に隠れて、濁った明るさの辺りが特に。

「ほらー。そろそろ出ないと遅刻だぞー」

「わかってるよ、姉ちゃん。…っーか、そっちも出ないとまずいんじゃないのかー？」

学校へ行く準備を整え、玄関へ向かう。

そんな動作も慣れたもので、弁当以外入っていないカバンの中をサラッと確認して、うん、いつも通り。

「大丈夫、大丈夫。いざとなったら、高速に乗っていけば済むことだしー」

家ではナチュラル過ぎて、相変わらずのダメっぷりを発揮している正義の人であるマイシスター。その周りには昨夜から飲んだ缶ビールがピラミッドになっている事を気にせず、テレビを見ながら此方に手を振る。

とりあえず、帰ったら部屋の掃除だ。憂鬱だなあ。

元氣よく玄関を出ることは出来なかった。早すぎたワケではないが、いつもより余裕を持てる七時四十分頃。三年間通い慣れた道を欠伸をしながら歩いていく。

今日の天気は本当にハナマルをあげたくなるほどよろしい。殺風景が広がり、日の光が少ない灰色の世界の感じが、俺をとても優しく包んでくれる気がする。

街中。駅前近くを通ると、俄かに騒々しかった。

あれから、もう一週間が経つ。

俺はあの日、公園のベンチに座る背広男に声をかけた。そして、奇

妙で不可解な体験、もしくは有りえない光景を見たのだ。

十八年間、生きてきて両親が死んだ時以上の衝撃だった感じているや、両親が死んだ事に対しては酷いほどの衝撃を受けたんですが。

唐突に深呼吸をして、大きくため息を吐いてみる。

無駄に冷えた空気が体を引き締める。よく言えば、気持ちも一緒にキュッと抑える。あえて言うなら、なんか油断したみたいにフワフワした気分が妙に落ち着かなくて仕方がない。頬をこねて無意識に出てしまう感情を抑える。

俺は一週間前から少しずつおかしくなっていて、突発的に奇妙な感覚があふれる。

奇妙といえば、去年高校を辞めた先輩。大暮市にはマジで出ると噂で有名なスポットがあつて、そこにある家の住人である先輩だ。この人は変わっていて、いや、性格とかじゃなくて。その在り方がとても潔いのだ。なんていっても卒業間近で中退したのだから。

その時だったか。

理由を聞いたのだが、その答えが妙にしっくりするもので。ああ、この人はこうなんだ、こうして生きているんだ、なんて在りのままに、自然のままに生きる姿を見て感銘を受けてしまった。

こういう生き方って確か、……あれ？なんだっけ？やべ、ど忘れ
しちゃった。最近、ドキュメント番組でやってたやつなんだけどな
あ。

大暮東高等学校。

駅から北へ二キロほどに向かった先の山の近くにある学校である。山の近くという事もあり、裏手には森が広がっており、もともとは農林高校であった。

しかし、それは四年前の話で、今は市内にあった商業と水産の科目を専攻できる高校と合併し、総合学科という一つの学校に多くの科目がある形になっている。合併当初は新しくなった校舎や新しく導入されるカリキュラムや制服がかわいいといった辺りが注目的になっていた。倍率も最初の頃はこの地方都市では珍しく三倍近くあったこともある。

でも、それは出来て二年間の間だけで、その次の年には定員ギリギリかちよつと多い位の数値になった。理由は詰め込み作業のような授業になってしまつからである。

この高校は入学した同時にそれぞれ選んだコースに分かれるのではなく、最初の一年は皆同じようにそれぞれの系列を体験しながら、普通の授業を受ける。その後、七つある科目の中から学びたいコースを選んでいく仕組みなのだが、何ともお粗末なもので。結局、他

の専門的な高校より一年間遅れて学ぶ事となり、結果、時間が他より少ないために急ぎ足な授業で薄いというか濃い授業とは言えない内容となった。

…まあ、そんな事は学校の説明会や資料をよく読めばすぐに分かった事だが、皆、そんな事よりも新設された高校とか制服の方へ目が行き、分かっていたが深くは考えなかった。

「ま、オレもその中の一人なんだけどね」

下駄箱から上履きを取り出しながら一人呟く。

自分以外誰も居ないせいか、辺りにそんな独り言が響いた。本来ならば登校してくる生徒達で賑わうはずのこの正面玄関。しかし、現在進行形で一人として登校者はいない。や、別に今日は祝日で間違っただけとか、先生に呼び出しを食らったみたいなバカな話ではない。単に遅刻しただけだ。……確信犯的に。あえて言うなら、俺のクラスは今体育の授業で教室に居ないところがキモ。

我が校は北側に五階建ての校舎と南側に三階建ての校舎の二つの建物となっている。

基本的には五階建ての方が生徒達の教室と職員室など普通の学校と変わらない教室がほとんどで、三階建ての方に専門的な教室や文化

系の部室とその他倉庫の教室でなっている、といった具合にわかりやすく区切られている。

もつとわかりやすく言えば、北側は新築、南は寂れた校舎。いや、見た目じゃなくて中身が。

というものの、三階建ての校舎が合併以前からある校舎で新しい方は新たに建てられた校舎なのだ。結局、合併するにあたって専門的な実習室が増やさなければならなくなった。そこで目を付けられたのが旧校舎だ。それにより今のような構造になった。

しかし、新たに必要になった実習室などはしっかりとした新品のような教室になっているのだが、それ以外のそのまま使用されている教室、特に改装した教室が隣にあるところは明らかに壁とかの色が違って酷いモノだ。

その点、北側の新校舎は中も真新しい。壁やドア、トイレにしても今風なデザインや機能性になっている。机や椅子もすべて新調されたものになり、あまつさえ、バリアフリーという名目でエレベーターやスロープさえある。

……こつちに金使いすぎて、あつちは手抜きになったのではないだろうか。

ガラツと音を立てて教室に入る。わかつていたが誰も居ない教室はそれはそれで寂しいもので。自分の机にかばんを置き、そのまま教室を出る。

「…さて。どうしようか」

このまま教室に居ても、クラスメイトが帰って来るにはまだ時間がある。

時刻は十二時手前。昼の休憩まで、あと、三十分近く時間を持て余す。今の内に飲み物でも買ってきたほうがいいのだが――

「……？」

下の階、二階から何やら騒がしい声が聞こえた。感じてきには口論をしているのような騒がしさ。時間を持て余しているオレにとってこの上ない暇つぶしになりそうな二ホイがする。

自販機も二階にあることし、丁度いい口実もあるから、ちょっとくらし様子見に行こう

そう思うと自然に頬が緩んだ。

下の階。

自販機のある休憩所のようなひらけたホールへ続く廊下。昼間だといふのに何とも薄暗い。その先から女の声がする。話の内容は分からないが、やはり口論しているようだ。

「…学校の生徒、じゃないか」

本来、今は授業中。俺みたいに遅刻したか、授業を抜け出さなければ、ここに来ることは難しい。

「……教師のほうか？」

と、考えたが泣きながら走り去る女生徒が見えた。思わず近くの壁に隠れる。正直驚いた。急に出てきたことに対してではなく、出てきた生徒に対してだ。あの娘は確か組の――

「おい、ここで何やってんだ？」

「うん？」

思い出そうとない頭を使っているのに背後から話しかけられた。人が懸命に考えてる時に話しかけるのは良くないなあ。

「今この辺まで出かかっているとこなんだ。話しかけ——って、あれ?……上池、セン、パイ?」

暗い廊下に溶け込むように、なにやら袋を片手に此方を見ている男の姿。年の頃はオレと一つしか変わらないのに髪が白い。その白髪の青年は、気怠そうな顔をしている。

一年ぶりの再会。

欠伸をして眠そうに眼をこする青年。それがもう、誰が見てもやる気のない態度で、どうしよう。すげー。相も変わらず興味が尽きず、尻尾とかあれば、ブンブン振ってしまいそう。

「よっ」

一年も会うことは無かったが、全く変化のない暢気な青年はあの頃を思い出させる。

「これって、不法侵入になりますよね?」

「バレればな」

こちらの想像以上なワケで。忘れかけていた、一年前に聞いたきりの、なんでもない声。

「バレなきゃって。オレがバラすって考えないんですか？」

「あ？バラす気なのか、オマエ」

ふーん、とまじまじ此方を見た後、白髪青年は興味を失ったかのように目を閉じた。視線が怖いですよ、先輩。青年にとつてそれが素なんだろうが、ガン飛ばされているようだ。……いや、それはそれで羨ましいんだけどね。オレ、いつもニヤケ面だし。

先輩は、この学校に何か用でもあるのだろうか。この人の事だから、もう一度高校をやり直すなんてことはない。可能性としては学校内の誰かに用があるくらいだろう。……いや、この人は出来るだけ他者と関わらないようにしているから、それも考えづらい。

「あの。学校には何か用で？」

「野暮用。それで、悪いんだが、場所を教えて欲しい。スッポリ忘れちゃってさ。出来れば案内してほしいんだ」

一年の間に中の構造忘れてしまったらしい。……オレも物覚えは悪い方だが、三年近くも通った学校の中を忘れるものなのか。いや、この人なら有りえそうな気がしてきた。

「あれ？玄関の近くに案内板なかったですか？」

「ああ。ここに来る前に見たよ。それで絶賛迷走中だけど」

「……うわあ。それって本当に迷子らしくていいですね」

この学校はちょっと変わっていて地下一階がある。ま、地下と言っても地面の下にあるワケじゃなく、正面玄関ある階層より下にあるからそう呼ばれているだけで、窓もあるし日の光もちゃんと入る。なんとも面倒な構造だが、山の斜面をそのまま使ったせいだろう。

青年はまたもやこちらを直視する。

「あ、いえ、すみません。変なこと言って、その」

彼は目を白黒させてオレを見る。

いいよ、と愉快そうにニヤついた。

「確かにその通りだな。いくら馬鹿でも母校を忘れるなんてあり得ないよな」

何が面白いのか、笑いながら吐き捨てる。

「あの、それでどこの教室に行きたいんですか？」

「ん？料理作る教室なんだけど、あれ？調理室？料理室？」

「調理室です。それなら第二校舎のほうだから渡り廊下を通って一階にありますよ」

また目を白黒させてこちらを見る。……この人、意外とかわいい面があるんだっとな。

「いや、ねえ。俺さ、案内してほしいって言ったの聞いてない？」

「その、オレ、今日遅刻して来てまだ担任に報告してなくて、それで校内をうろつくのはちょっとマズイというか……」

白髪青年は似合わないくらいの真面目な顔でこちらを見る。滅多にない、というより初めて見た顔だ。…この人こんな表情が出来るんだ。

「そうか、それなら無理強いは出来ないな」

白髪青年は笑う。生まれつきそうであつたかのような自然さで。

もつと話したくなつたが、チャイムが聞こえた。午前の授業の終わり。

「あの。また会えたりします?」

「いや、学校内ではもうないと思う。アイツにはこんな事ないよう注意するし」

すこし焦る。そろそろ時間だ。

「なら、先輩の家に行くのは大丈夫ですか?」

「はい?」

昔、彼の家に訪問したことがある。灼熱のような夏の季節。昼下がりに上ったあの長い階段。

「俺の家にか？……いいけど、何もねえし、何も出さないぞ」

わかっている、と返すが何やら難しい顔になったと思うと、きしきしと笑う。

「おまえ、昔と少し変わったよな。まあ、どうでもいいけど」

白髪の彼は皮肉げに、そしてドキリとすることを笑って言った。

こうして一年ぶりにオレは上池常夏と再開した。

思えば、オレにとって数多い中でも大切な繋がりだったと思う。

上池先輩と再開する事以外は特に変化もなく一日の学校生活は終わった。

日が沈んで、なんとも気味の悪い時間になった。

ドクン。ドクン。ドクン。

なにか急かされている。この衝動がどこから来るものなのか分からない。

目的がわからない。

初めは何も考えずに。誰かに話しかける事が悪いことなんて思わず。面白そうとか、何かを訪ねたいとか、助けたいとか損得の問題とか価値とか在り方とか。何らかの意味はなかった。

最初は無償で話しかける人間だった。でも、少しずつ変わっていった。むしろ、何でそんな純粹だったのか、最近はその理由を持っていた昔の人間がバカみたいで。

「——って、やばいよな、オレ」

自分らしくない…のは分からないが他人事みたいにツツコンでみる。おかしいのは自分の事だからよくわかつている。この先どうなるのかはわからない。このままでもいいのかなあ、と将来を自分なりに考えてみたが、やっぱりそんな事がわかるはずもなく、いま出来る事しかみいだせなかった。

「ま、そのほうがオレらしいだし」

しょうがないよね。

そうと決まれば、気ままに行動するのがいい。他の人間には趣味とか特技があるんだし、これも趣味の一つだと思う。なら簡単だ。オレも他の人と同じように夢中になれば、自分に負い目を感じることもない。

というワケで、今日も公園に向かってみる。

ドクッ。ドクッ。ドクッ。

リズムよく、跳ねるテンポ。

三拍子とかワルツとか、そんな感じで体の中が躍動する。

ただ歩いているだけなのに、じんわりと体から汗が出る。冬だとい
うのに上着を脱ぎたくなる気分。けど、そうはしない。公園が見え
た。ベタツとしていた感覚が剥がれていく。

季節は冬。

今日もオレはおかしくなっていく。

この公園には最近までは、小さい頃に行った一度だけしか入った事
がない。普通の公園が庭だとするなら、この公園はちょっとした迷
路だと思う。

もともと十字路があつた場所に造られたこともあつて、公園内の路
は十字路の道幅を狭めただけのアスファルト。公園内の中央に遊具
などがあり、それ以外の場所は原っぱな感じでどこも同じに見える。
十字路に合わせて入り口は東西南北に一カ所ずつの四カ所。その入
り口にしてもどこも同じビルが並び、公園を出てもどこなのか迷う。

一度、造りとか違いを把握しようと散策したが、とても出口にある
看板なしではわからない。もし、これで夜なら看板も見えないから
どこに出るか本当にわからない。

調べたところによると、設計者は有名な人物という事以外は不明。名前も性別も。年齢さえも。

分かっている有名ってのは、なにで有名なのかさっぱりわからない。

そういえば、この公園も有名である。

土地勘のない他県の親子が夜まで遊んでいて、警察に電話をかけて救助してもらったという都市伝説だ。……いや、ねえだろ。

担当した警察管は、なにかの間違い電話かいたずら電話だと思い、一時間以上経ってから様子を見に行って本当に助けを求めていると判明したとか。そういう入る時はいいが、出たらここがどこなのか分からなくなる魔境の公園である。

そして、今日もその謎を解明出来ず、この場を後にする。

週末の日曜日。

自分としては珍しく休日に出る事にした。

目的はないが当てがある。そんな感じのスタンスだ。

珍しいといえば、毎週末には帰ってくる姉が忙しいのか帰れないと連絡があつた。あれでも、現役バリバリのキャリアという事なのだろう。電話越しでは、あのオカマ上司がとか、どうでもいい殺人事件に回されたとか。警察管にあるまじき事を言つては本気で嫌がつていた。……だいじょうぶだよな、日本の警察って。

「つーか、相変わらず長い階段だな」

前に一度来た時は季節は夏で汗を掻きながら上つたのは今でも覚えている。

「で、今回は冬。しかも雪が降っていると」

前回と真逆の環境。昨夜に積もった雪で階段が上り辛いうえに滑り
そうで怖い。

街は例年通りの雪に見舞われていた。

二月に降る雪は、冬で一番こたえる冷たさだ。

夜のうちに白い結晶が街を一変させ、音が消え、死んだようになっ
てしまった。そのせいか周りには人の気配が感じられず、時折ふく
風だけが静かな世界にアクセントを加えている。

今はちょうど中間地点まで上っているはず。確認したいが出来れば
振り返りたくない。高所が苦手であるオレがここまでたどり着くだ
けで神経を使ってるというのに、恐怖で滑って落ちるなんて馬鹿な
ことはしたくない。

ここまでする目的がこの先にあるワケではない。予感とか直観のよ
うなものがあっただけ。慎重に足を上げて降り積もる雪の階段を上
っていく。

そして、彼はそこに立っていた。一年前の夏の日のように。

白いだけの世界に溶け込むように作務衣に上着を羽織った青年は雪掻き作業を中断してぼんやりと此方に視線を向けた。

「ちす。先輩」

上池先輩はいつもの素敵な、鬱陶しそうな顔をする。

「あのな、ヒヨコ。来ていいと言ったが、こんな日に来る奴がいるか。今あの階段を上るなんて自殺行為でしかないぞ」

「ひどいなあ。せつかく大好きな先輩の家に行けるから楽しみ過ぎて、待ちきれずに急いできたのに。昨日の夜は眠れなかったんですよー」

「だからお前はヒヨコなんだよ。警戒心ゼロで誰構わずトコトコついて行きやがって。それだから傷害事件に巻き込まれるんだよ」

「え？　なんで知ってるんですか？」

「そりゃおまえ、今マワリさんの手伝いしてんだから」

あ、なるほど。そういう事なら納得だ。

上池先輩の家庭は普通とは少し変わっている。幼い頃に両親を亡くし、親類ではないが両親の知り合いに引き取られ、資料上では養子関係の親子となっている。が、彼と神父さんの関係は親子と思えないくらい、清々しい。上池先輩には遠慮さというものが欠けており、あの二人の会話は親子以上、友達以下に見える。本人曰く、悪魔と契約してしまったのだ、とか。ま、一度しか二人が話すところを見たことは無いが、あのやりとりを見るのは楽しい。

「先輩、中退してからそんなことやってたんですか」

「別に。まともじゃないけど、それなりに幸福を感じてるし、それなりに生きて、それなりに死んでいくよ」

言葉の一つ一つを聞き入る。一年前にも同じようなセリフを言っていたな。

……けど今の反応は少し違和感を感じてしまう。言葉使いというか雰囲気辺りが。

「なんか少し変わりましたね。…どうせならオレの呼び名も変えてくれればよかったのに」

「おまえの根本的な部分が変わってねえからだよ。警戒心、希薄過ぎ」

先輩曰く、警戒という事を一切しないでトコトコ雛ひなみについてくる様子と名前が比奈ひなということでヒヨコだと。先輩のセンスは疑いなく悪いのはわかるが、そう名付けられても仕方がない。思い当たる節が有り過ぎる。

「…そんなズバズバ言わない方が良いですよ。女の子に嫌われますし」

「嫌われる以前に興味持たれないだろ。あ、居たんだあ、みたいな」

む、自分の頭がどんなか忘れてんですかこの人はっ。

……いや、やめよう。その事を喋った所でどうにかなる人ではないんだ。ブランクはあるが、それなりにこの人の事は理解している。それに、コレこそが先輩の味なんだし。

古時計が昼になったと合図を送ってくる。テレビから昼の番組の始

まりの合図が流れてくる。先輩は特に気にすることもないから、昼飯は食べないのだろう。

さて、そろそろ帰宅の時間かな。

得るモノは有ったし、出来れば、次に会う約束も取り次ぎたいところでもある。

「先輩。先日辺りに公園で起きた事件のこと知ってますか？」

「俺は、その質問が脈略なさ過ぎて、その意図が知りただけど？」

「いいから答えてください」

「……まあ、知ってるには知ってる。けど、深く知らないし。そういうのならマワリさんがネチツこく教えてくれるぞ？」

「いえ、犯人は誰か真実がどうこの話じゃなくて。先輩が知っているかどうかの確認みたいなもので。後、その事件に対してどう感じます？」

「特にない。奇妙ではあるが、珍しいワケでもない。頻繁には起き

て欲しくないけど、たまには刺激が欲しいって感じ」

先輩の言葉は非当事者から述べられる、楽観的な感想だ。これこそ尊敬する先輩である。

「うん。時々ならいいですね」

「だろ。運次第では被害者にも加害者にもなるところが」

……やっぱりスゴいなあ。この人は運が良いか悪いか、事件が起きることを、その当事者たちに対してもそういう風に捉えている。命の危険を感じさせず、軽んじているワケでもなく、未来なんてわからないもんじゃん？ と言。一般人らしい捉え方が多々ある分、共感出来るところがある。ま、理解は出来ないけど。

「じゃあ、興味はないワケじゃないんですね？ 普通にもっと知りたいたかと思う感じに」

「だな。知ってしまえば気になる。少なくとも結末も知りたくなる。けど、変に関われば面倒に巻き込まれるから自重してるつもりだ」

マワリさんに知られたらまずいからね、なんて半分くらいマジなコメントを頂きました。

「そういうヒヨコは？ おまえ、好奇心旺盛だから興味津々だろ？」

「人物に対してじゃなくて、その事件そのものにですけどね。それで先輩。仮に、その事件に関わってしまったとしたらどうします？」

「……自重してる相手にイヤなこと聞くな。まあ、そうだな。事件である以上は解決しようと努力するとは思う」

まったくもって見合わない言葉を使う。努力とか必死になるなんて凡人ではない上池先輩には想像できないものだ。

「オレは究明ですね。解決する事で事件は終結したとしても、謎が全てわかった訳じゃないと思うです」

「いや、なんでもかんでも知るなんて、神さまにでもなる気か？」

「……探究心という意味です。それに神さまは飛躍し過ぎです。言うなら刑事とか警察じゃないですか」

「いやいや。それなら学者も入るだろ？あれこそ探究心の塊のようなもんだし」

「失礼ですが、あれは分かっている事を知恵として吸収しているだけですよ。だいたい、ただ記録して記憶する行為は単なる作業ではないでしょう？そんなの探究でもなんでもありません。刑事ならまだギリギリ許容範囲ですよ」

……やり過ぎた。ビー玉みたいな目でこちらを見ている。かなり偏った自分の考え、しかも不本意だが、身内贔屓に喋っていた。駄目だなあ。今は他の事を優先したい。

「お前は今、全ての学者を侮辱したことになるな」

「はい。でもまあ、オレ個人の偏見だから当然ですよ」

不意に部屋の戸が開く。今まで見慣れていた表情が変化する。今日は早いな、とオレではない誰かに声をかけた。

「おや？客人が居たのですか」

「久しぶりに再会した後輩だね。また会いたいと言ってマジできやがったんだ」

少し傷ついたが、新しい変化なので怒るのは後回しだ。今はこの女性が気になる。

「あの。先輩、いつの間にこんな綺麗な彼女出来たんですか？」

先輩の耳元でささやく。別にひそひそと話す事はないのだが、なんかあの女性に威圧された自分がいるだけ。

「どうもこうも、こいつは俺の女じゃない。ただ、ここの風呂を銭湯のように通っているだけだ」

だが、先輩は気にすることなく彼女に聞こえるような声量で喋る。
…一応、気を使ったつもりなのに。

「うほ。なんて冷たい言葉。そんな理由で毎日来るなんてありえませんって。女の子が男の家に通い詰るなんて決まってるじゃないですか」

不思議なものを見るような目をされてしまった。

先輩は言ってる意味はわかっているようだが、ありえない事のような顔をする。この人。それすら気づけないですか？

「言つとくけど、冗談にしか聞こえないからな、その話」

「うわつ。愛想ないなあ。そんなんじゃあ嫌われますよ」

妙な沈黙が続く。先輩はテキストにチャンネルを回し、彼女さんは彼女さんで入浴準備で脱衣所に向かった。……もしかして、オレはおかしなことを言ったのだろうか？

「ん？ ああ、そんな事はないぞ。むしろ正しいことを言ったと思う」

じゃあ何で二人とも何も言わないのだろう。少なくとも正しいと言った先輩だけでも何か答えて欲しかった。というか女の子は特に反応もせずに居なくなるし。……やっぱり、余計なことを言ったのだろう。

「…先輩のその態度は今に始まったわけじゃないからオレは分かっていますけど、彼女さんは知っているんですかね？」

先輩は肩を竦め、興味がない、といった感じである。まともに答える気はないらしい。

彼女と先輩の関係はどのようなものかはハッキリしない。最初に見たやりとりを見る限り、友人である事は間違いない。けれど、そういった軽い関係でもないように見える。そう、もっと重い、好き嫌いで関わっているような甘いものではなく、ドライなもので深い繋がり。……正直、羨ましい。」

「……じゃあこれくらいはちゃんと答えてください」

なんだ？ と心底イヤだと言いたそうな顔をする。

「名前。彼女のまだ聞いてません」

……いや、そんな驚かなくても。ここ一番の驚きようである。

「え？なんで？ 知ってるんじゃないのか？」

「知りませんよ。紹介もされていませんし、第一に知っていたら忘れるはずもないです」

「おかしいなあ。アイツはあのガッコーで教師やってるはずなのに」

教師？ ……それはない。オレは物覚えは悪いが人物を忘れることは

ない。だいたい一目見れば覚えることは、オレの必須的な特技だ。つまり、見たことがないだけか、これはないと思うがオレの記憶違いということになる。

「…一応聞きますけど、何を教えてるんですか？」

「料理。それ以外は詳しく知らないが」

料理？食物科の先生？…まったく思い当たらない。確か三人居たはずだが、皆、三十路を超えた教師しかいない。というより、学校全体でもあんな若い人はいない。

…いや、まてよ。確か春に臨時の講師が来たという話を聞いたよ
うな。

「もしかして、春からやってます？」

「そうだな。その辺りからやたらと話に出てきたから多分そうだろう」

間違いない。どおりで記憶にないワケだ。だって、知っている以前に彼女と会うなんて、まず、あり得ない。

「わかった。彼女は教師といえば教師ですけど、正確には違いますね。確か海外の料理を深く学ぼうという事で特別講師としてきている人です」

「はっ。つまりアイツは職に就いているが正社員ってわけじゃないのか」

俺と変わんねえじゃん、と心底笑う。先輩、なんか黒いです。

「先輩。それで名前を」

「——はは……。んっ、名前な。名前はアンリ・シャリエール」

「って。外人っ——！？」

なんだろう。最近は驚くことが多い。上池先輩と再開してからはさらに。

「あれで日本人じゃないとか何の冗談ですかっ」

「いや。これがマジなんだって。マワリさんが躍起になって調べた

んだから」

本日何度目だろう。先輩の言い方から察するに、あの神父さんですら見抜けなかったらしい。凡人のオレが勘違いしてしまうのも仕方がない。

長く黒い髪に白い肌。少々目つきは鋭いが悪い感じはしない。しかし、あの身のこなしと違和感のない日本語は卑怯だ。あれでなんだって外人なのだ。

「しかも、日本の事をこよなく愛しているみたいでさ。このまま戸籍とか取って永住しそうな勢いなんだよ」

パチモンの日本人ではなく、本物になろうとしている。やばい。マジだ。あの人。

「——あ。こっちもヤバイ。そろそろ時間だ」

時計を見るとそろそろ出た方がよい時間帯。本当はもっと居たいが人間引き際が大事だという事でここは一つ。

「何か用事でもあるのか？」

「いえいえ。人様の家にあまり長居するのはいけませんから」

そうか、と特に感情もなく言われると少し傷つく。

「じゃ、また、暇な時にでも来ますんで」

あいよ、と手を上げて答えてくれて少しうれしくなる。ついでに、さり気なく次の約束も取れた。予感があったが、会いに来て本当によかった。

それから一週間。

オレはちよくちよく先輩の家に尋ねた。学校帰り、休日、たまに通学途中。去年の秋に決まった内定が年末に巻き込まれた事件によって取り消しになっている自分としては本当に何をしているのかと珍しく危機感が芽生えたが、先輩に会ってしまうと忘れてしまう。

先輩は先輩で予想通りついにかいつも通りグータラした生活を送っている。でも、いつものんびり過ごしているが、その日ごとに様々な事をやって過ごしているようだ。

起床はほとんど一般人と変わらず、朝食を取り、その後、たまに敷

地内に不法投棄される壊れた電化製品や古い家具、チェーンの無い自転車、後なぜか工事中に掲げられる看板等々、わりとバラエティに富んだゴミの中を物色し、それらを弄っては家の中に持ち込む。何かに使えそうとかではなく、たんに気に入ったかららしい。そのコレクションとはある一室に放り込まれているが、たたみ十畳はあるだろう部屋はゴミで一杯になりそうだった。

新たな発見ではあるが、本気で止めた。…あれではいつかゴミ屋敷になってしまう。

そんな上池常夏観察日記が一週間を過ぎた水曜日の帰り、思わぬ形で出会った。

「初めまして、は違いますね」

こんばんは、と言い直す相手。

ものすごく良い笑顔で、神父さんはこちらに挨拶してきた。ちょうど家の近くにある坂を上っている途中でオレは下方、神父さんは上方にいる。

遠野周。先輩はマワリさんとかとオマワリさんとか呼んでいるが、その度に畏怖の感情が見え隠れしている。オレから見れば心優しいそう、神職のお兄さんにしか見えない。

……そうとしか見えないはずだが、いや、正面で向き合ってみると何とも居心地が悪い。見下ろされているだけなのに蔑みに似たものを感じる。対峙する時は油断もなく躊躇もなく迎え撃て、と聞いたが本当なのかも。

「本当に面倒ばかり持ち込みますね。…では、単刀直入に言います
が常夏くんに纏わりつくのを辞めなさい。彼に近づいたところでキ
ミが望む結果は得られない。そもそもそんな余裕、常夏くんにはも
うないですし、手遅れです」

「……………」

突然の事に驚いた。理由を聞きたいがうまく話せるだろうか。

「……それって、どういう、意味でしょうか。オレは、ただ、先輩
とは知り合いで……会いに行ってるだけです？」

「冗談を。それだけの理由なワケがないだろう。私の言いたのは下
心を持つなという話だ。一人の人間のお荷物になろうとしてるのか、
と言いたいんです」

……やはり親子なんだな。資料とか関係なく、親と子なんだ。

ほんの少し言葉を変えるだけで世間的に見れば、学生であるオレがふしだらな生活を送る人間に関わらないように注意しているのだが、神父さんの言葉は完全に此方を思っただけではない。それこそ、こちらに何も感じていないような空っぽな言葉。まだ嫌われている方がマシだ。

「……下心さえなければ、問題ないという事ですか？」

「ええ。すごく都合の良い話ですが。でも、こちらが好きであんな屑を自分の下に置いていたのではないんです。面倒事が増えるくらいなら、ゴミを処分したい思いが大部分でね。わかりますか彼野くん。彼らのような社会的ゴミがどれだけ価値を持っているのか。私から言わせれば、無駄としか言えません。……私は、割と合理主義でしてね。しない主義なんです。無駄な事は」

何かを欠如、いや、省いた完璧超人。……恐ろしい。こんなのと先輩はなぜ普通に話せるのだろう。オレなら逃げ出したい全力で。

「……用件はそれだけですよね？ 大丈夫ですよ、オレは“面倒事は起こしませんから”

「——悪そうでよく回る頭ですね。……ああ、そうでした、去年の暮れは起きた傷害事件に関わっていたみたいですし。きみの感じた

通り、これは他人を思つての事ではなく、この私を思つての決定です。なにも私が面倒事を持つてきてるワケじゃない。この十年間に起きた面倒事は殆ど“彼”に係する事でしたから」

彼とは先輩の事だろうか？ まあ、それなら納得できる。あの人は目立つ行動をしているワケでもないのに何かと目立つ。そして、何かが起こる。

二年前。オレが入学して間もない頃の事。幽霊部員を志望していたオレが入った部活は卓球部。特に強いわけではなかったが、そこそこの実力で市内では敵なし。しかし、県大会では全く歯が立たず、いつも初戦落ちの微妙な位置にいる部だ。

ゆえに、特に厳しい練習はせず、出ても出なくてもよく、部内の結束とか友情関係は冷めていた。オレとしては下手に文化系の部活に入るよりはこっちの方が無難だった。

そんな部活に入ってようやく入学当初の浮足立った雰囲気が無くなつてきたある日。たまには部活に顔を出そうかと、入部以来行つていなかった体育館に向かった時だ。白い頭の人物が横切った、それが先輩。

以来、なぜか興味を惹かれたオレは先輩の行動に目が行くようになった。そう意識することもなかったが。

先輩に関しては勝手に目に付くほど話題になるのだ。…まあ、ある意味、みんな気にはなっていたという事なんだろうな。オレもその一人だし。

そうしているうちにオレは先輩と関わるようになり、二年近くそばで見えてきたが、静か過ぎていているようで周りは何かと騒がしい。それらの発端は先輩にあるのだが、本人は気づかず、鬱陶しそうな顔をしていたのは、ついこの間のように思える。

「まあ、たんなる偶然に過ぎませんが、こんなにも続くとそう言いたくもなりません。なにしろ、彼は無自覚ですから。これで、気づいているのなら、まだ、見込みがありますが、全くの皆無だ。金も時間もあるにはありますが、意味がなければ使いたくないのが本音でしてね」

これは神父さんの愚痴だ。それと同時に他人であるオレにあえて話すのは警告ということだろう。これ以上厄介事を増やすな。注意はした。それでもやるというなら容赦はしない。

「……つまり、先輩に関わるのならお守りをしろってことですよね？」

「そこまで言っただけはありませんが。そうですね、もし、きみの知らぬ所で常夏くんがトラブルを起こすような事があれば、いく

ら身に覚えがなくともキミを疑うことになる」

「……いや。オレは、本当に下心なんてありませんよ」

「それなら結構。それならここまで出向いた価値が上がります。でも彼野くん。あまり首を突っ込むのもよろしくない。最近なぜか頻繁に街中の公園に通っているようですね。何か、気になる事でもあるのですか？」

「……もう、いい加減慣れたと思っていたが、やはり心臓に悪い。それにしてもおかしい。答えられない訳ではないはずなのに、正直、答えたくない。なぜか、答えた後の反応が未開の地に踏み込むような、知らぬモノに対しての恐怖のようなものを感じる。」

言葉にしてもなんて事もないはずなのに、どうしてだ？

「……先月あった、事件ですけど、どうなったのです、か？」

「――」

じわじわと締められていた筈の圧迫感が急速に増す。

一瞬だけだが神父さんの表情が変化した。能面のような笑顔を絶やさなかった神父さんにしては珍しいけど……あれは、視線だけで吐き気がする。

「いずれわかる事ですが、事件で死亡した人物は市内に住む会社員の男性です。遺書がない事や死因から考えて自殺のようです。……ただ、動機が分からない以上、確定とは言えません」

吐き捨てるように言う。表情はうまく取り繕っているが言葉には些細ではあるが感情が乗っている。神父さんは苛立っているようだ。それは事件に対してか、或いは、オレに対してか。

「神父さんは色々詳しいみたいですけど、何か繋がりがあるんですか？警察とか政治家とか。市内の大物に顔が利きそうに思えますが？」

「キミほどではありませんよ。ある意味才能なのか、気付けば多くの人と関わりを持ち繋がる、なんて芸当は普通出来ませんから。……もし、よかつたら私の手伝いなどしてみないですか？」

悪い意味で微笑しながら神父さんはオレを見据える。

視線だけで凌辱されている気分だ。恐ろしい人だなあ。さっきのは明らかに神父さんの犬になれって事で、つまり、神父さんはオレ達

のようなアウトローを人間として見ていない。最後の言葉なんか家畜を飼うような感じだったし。もし、それでヘマなんかした日には、あらゆる理由なんか足蹴して調教という名の公開処刑が待っている。いや、社会的な意味で。先輩あたりなら、邪神降臨っ！とか言うて逃げ出しそうだ。

ともあれ、話は予想通り、いやそれ以上にいいモノだった。詳しく聞いてみたところ、事件の決定的な証拠や物証が出ておらず、そのまま自殺として流れていくらしい。これは、幸か不幸か。

「あれ？遠野さんがいるー。それにヒナも。珍しい組み合わせだけど、道端で何しているの？」

確かに当然の疑問ではあるが、さっきまでの緊張感を察する事が出来ない我が姉とインパルス400。豪快な近所迷惑極まりない。

よっと、ヘルメットを脱ぎ頭を振る。

「ほらー。お姉ちゃんが帰ってきたぞ。敬えー、祀れー、掲げろー」

意味の解らない日本語を喋りながら、やたらとくっ付いてくる。

「ちよっ……。ベタベタ触るな。つか、苦しいっ」

家族はコミュニケーションが大事とは姉の信条で、いや、トラウマのようで過剰なスキンシップをしてくる仲睦まじい姉弟。なんてモノに見えるが、実際には鍛え抜かれたボディーによる強制プレスを食らっている。…ま、アレだ。ヒグマとかライオンが幼い頃から兄弟のように育ってきた人間に昔のようにじやれてきているようなものだ。そこには悪意も邪気もなく、近い者に対する親愛であるから変に無碍に出来ない辺り厄介極まりない。

「仲の良いご兄弟ですね。なんとも微笑ましい」

……くそ。あれはそんな感情を持った目じゃねえ。もっとナマモノを見るような視線だ。

「……くっ。離れろ、バカ姉っ！」

当然、そんなものに耐えられるはずもない。持てるすべてを行使して引き剥がす。

「なっ」

予想外の事に呆然する。

「な、なんでっ。いつの間にそんな技を習得してるのよっ」

出来ればツツコミはもっと別の所に入れて欲しい。そして、こんな事が頻繁にあるから習得したのですよ姉さん。…しかし、悲しいかな。弟である以前に男として全力を出さなければ逃げ出せないとは。

…いや、そんな事は後で悩めばいい。それよりも、なぜ、こんな平日に姉は帰ってきたのか気になる。

「つーか姉ちゃんは何で帰ってきてんだよ。仕事が忙しいって言うてたろ？」

「んー、それがね、ちょっと色々ありまして……」

そう言いながら神父さんへ視線を送る。

何か他人に聞かれたくない事なのだろうか。…本当はもっと神父さんに聞きたい事があるのだが、ここは身内を優先すべきだろう。名残惜しいが。

「…あー、じゃあ、さっさと帰ろうか。話はそこで聞く」

「…そういう事じゃなくて、その、」

歯切れの悪い答え。

…意味が解らない。オレにも話せない事だということのか？

先ほどまでの和やかな雰囲気から一変してギクシャクしたみたいな姉弟。それを見るに見かねてか、関係ないと思っていた人物から一言。

「それは、私が呼んだからですよ」

……はい？

「いえ、正確に言えば呼んでもらったと言う方が正しいですね。まあ、詳しいことは話せませんが、そういう事なので。…さ、行きましょうか彼野さん」

そう、言つと姉から渡されたヘルメットを受け取り、バイクに跨る。まさか。いつの間に出て来てたんですかこの二人っ。

「その、ごめんね。時間がある時ちゃんと話すから。あ、そうだ。最近は何騒だから夜出歩かず、戸締りはしっかりしてね」

姉ちゃんはそう言って、その場でドリフトターンして枝雀な住宅街を規制速度ぶっちぎっていった。

神父にバイクって。すげえシユール。

我が家に一人。そんな状況はもう慣れていた。

しかし、今日は嫌に静けさが気になる。嵐のような姉にあったからだろうか。

しん、と静かな家の中。近所も死んだように静かなせいか、自分の家に帰ってきたはずなのに、そんなふうには感じれない。

どよん。

それにしても今日の神父さんとの地獄篇は少々堪えた。神父さんは元々姉に用があつたらしく、オレと話したのはついだったみたいだ。あの後、すぐに姉から電話がかかり、自分と神父さんはオレが思うような関係ではないと勝手に誤解していた事を訂正された。あの姉にそんな人が出来るなんて事は驚きだったが、やはり流石オレの姉ちゃんなワケだったし、おそらくいつものように時速八十キロでかつ飛ばしながら電話をかけてくる辺り驚異的と言えるだろう。

……そのまま、しょっぱかれちまえばいい。

居間のソファに倒れこむ。テーブルのチャンネルを手探りに取りポチッと。LEDのテレビからは夕方のニュース番組らしく政治家の汚職やグルメ番組が流れている。今日も平和ですね、と何も変わらない日常の中に、いつものと違う非日常ニユースが流れてきた。

『——昨夜零時過ぎ。大暮市長内坂中央公園内で死亡している女性が発見されました。今の所、身元については不明となっております、警察が現在、身元の調査を進めて——』

ついさっき忠告を受けたが早速も気になる情報が流れる。さすがに出来過ぎではないのか。これでは神父さんはわかっていて、あんな事を言ったように思える。……いや、ここまでくると滑稽こっけいである。あれは分かっただけで言っただ。

気づけば家を出ていた。

ドクドクドク。

走る。走る。走る。

今日はいつもに増して急かされている。錯覚かもしれないが焦って

いるようにも感じる。…もちろん錯覚だ。

どよん。

どこも同じに見える入り口、その先は距離感の掴みにくい路が続く。^{みち}別の入り口を選んだところで、この風景は変わらない。この公園は迷路である。

いつものように踏み出そうと思ったが、少し躊躇してしまった。

『Keep out』

踏み入れるな、と鎖のように張られたテープがどうしても気になる。

……今日は出直そう——なんて事はハナからなく、そもそもそんな弱い気持ちでここに来たのではない。公園内を物陰から一見し、周りを拳動不審にキョロキョロ見回る。

——異常なモノなし、不審者は一名いるが、許容範囲内なので問題なし。

安全を確認した後、スー、と吸い込まれるように迷路へ突入した。

……ここは影絵の世界めいている。数力所しか設置されていない電灯。それも路しか照らさない弱い光のせいで、それ以外の場所に踏み込むことを躊躇せざる負えない暗い闇が広がっている。路以外は真っ暗の世界。ずんずんと進んでいく。たまに後ろを振り返る。出口からさほど離れていない一本道なのにどうしようもなく帰りが心配になった。

ああ——今ならわかる。夜の公園で親子が遭難した噂は、限りなく真実なんだ。それで、オレも、もうすぐそこへたどり着こうとしている。

路を見失わないように歩く。

公園内の中央へたどり着いた。ペンキが所々剥げ落ち、錆びついた遊具は風に揺れて軋む。それ近くにある、これまたペンキが剥げた灰色のベンチが一つ。

あの遊具、検査しているのか。……いや、そもそも、この公園そのものをどうにかしなければならぬように思える。

ここが目的地だ。

最近は幾度となく見た風景をベンチに座りながら自分の記憶照合して見る。

特に変化はない。

違いがあるとするなら、先月からある被害者へ花束の近くにビニールシートで覆われた空間が増えたくらいだ。ただし、いかにも、ここで何かありましたよ、といった感じ。

「……というか、あからさま過ぎやしないか？」

昨夜に起きたはずの事件だ。普通、公園内は封鎖され入り口には見張りが居て、中には現場検証をしている者がいるはずだ。確かにもう辺りは暗く、昼間のうちに作業は終わってしまったのだろうが、ビニールで隠し入り口には入るなとテープを張っているだけの処置は、人が死んでいるというになんとも杜撰な対応ずさんに思えて、いや、呆れるのも通り越して良い仕事してやがると思った。

「…ま、そのおかげで中に入れたんだし、これはこれで良かったかな」

国もなかなか捨てたもんじやないと初めて国に感謝したが、やはりダメな仕事には変わらない。

ビニールシートの囲いへ進む。手で掴み、引っ張る。だが、力が足りず、仕方がないと体も使って引っ張ろうと思いつき後ろへ体重をかけた瞬間、

「——は？」

手が滑り、その反動で上体が後ろへ倒れていった。頭を庇う事より先に、しまった、という感情が出てしまう。動かす事より感情が出てしまったオレには受け身さえ取れず、そのまま倒れる。

「——はず、だった。」

「——え？」

倒れた先の感触は冷たい雪の地面ではなく、柔らかく温かく感じるモノだった。

知らず知らず、そちら側に踏み込んでいたのか。それとも、本当は地面に頭をぶつけて打ち所が悪かったのか。オレを受け止めてくれたのは女の子だった。ただ、初対面ではなく二度目であり、再開と

言える。

何処かドラマめいた一面のように辺りが凍った。今、この瞬間。どんな地獄だろうと、どんな楽園だろうと。

一度目が言葉にならず、それから日は日に日に大きくなる想い、何か急かされているように探した。

「また、会ったわね」

これ以上はないというぐらいの、儚さを感じる――

「あの時の言葉、まだ覚えているかしら？」

ドクン。深く踏み込んだ言葉が叩き込まれる。心臓はボールのように、叩き込まれた言葉に舞い上がった。

この子が先月起きた事件、奇妙と言われた事件の犯人。どう見ても大人はおろか子供さえ殺すことは出来なず、逆に死んだような終わってしまった永遠さを持つゲーテと名乗る女の子だ。

彼女の問いに小さく頷く、オレを抱えた彼女は薄く笑った。

何が面白くて嬉しいのか解りかねる。

あの時の言葉を忘れていても思っただろうか。それとも、笑うことが彼女の癖なのだろうか。どちらにしてもそれが笑いに繋がる理由が解らない。ただ、嬉しそうに笑っているようで、何も感じていないようにも思える。…女心はよく解らない。

そんなオレの思惟^{しゆい}など余所に、彼女は言葉を続けた。

「ねえ、この再開はなんだと思う?」

——そうだな。

少し考えてみたが、判らない。…そうだ、判断出来るはずもない。

普通の状況ならともかく、こんな近くに女の子の顔がある状況でマトモな思考が働くはずがない。ましてや、運命とか奇跡なんて大層なモノ過ぎて、そうは思えない。かといって、偶然なんて表現は、

何とも味気ない。何より面白みに欠ける。

まあ、そうだな……つまらないかもしれないが、此方としては必然だと願いたい。

僅かに考える仕草をして——口を開こうとした。

すると、彼女の赤い双眸そつぼつが此方を見据える。

自分から見詰めることが多いせい、逆に見詰められるのは苦手だ。それが、今、目の前にいる彼女なら余計に直視することなど出来なはずだと思ったのだが、どういう訳か目の前の少女は当てはまらないようだ。それこそ、ずっと見ていられそうなほどに。

やはり、どこか頭をぶつけていて打ち所が悪かったのか、或いは、彼女自身が持つ魅力がそうさせているのか。

「そう、ね……私も必然だと願いたいわ」

……驚いた。彼女は人の心が読めるというのか。

「いいえ、読めるんじゃないくて、見えるの。…でも、あなたは賢い

のね。いえ、運が良いみたいね。だからこうして私と再会できた。あなたは正しいわ。もし、話しかけていれば、あなたは死んでしまうのだから」

笑う。

なんとも薄気味悪い笑顔のはずの、その顔から、目から視線を外せない。

もうこの際、彼女がなぜ心が見えるのか、話しかければ死んでしまうのかなんて関係ない。

よろしい、と彼女は頷き、そして何か疲れたように口を開いた。

「さて、次のお話をしましょう。それで今日のお話は終わり。そして、残念だけど、これでもう会うことはないわ」

言葉は突然であまりにも唐突とし過ぎていて、オレは答えられない。

彼女は感情の無い機械のような感情。

「あなたは他人に、何を求めているの？」

わずかに思案してオレは彼女の眼差しに応える。

「…そう。あなたは他人に依存して生きている。楽な生き方のように辛い方。でも、今のあなたは上手くいつている。だから大丈夫。お姉さんに負い目を感じることも、見ず知らずの他人に関わりうとする無謀さも。今のあなたなら大丈夫。だから、これ以上おかしくなる事もないわ。——でも、仮にあなたが“此方側”に来るようなことになったらタイヘンだわ。そちら側にいれば健全だけど、あなたは我慢がきかないから」

気を付けなさい、と言葉を聞いた瞬間、いつの間にか彼女とは離れていた。

……自分より年下に見える少女に窘められた。

…境界は越えるなか。越えてはいけない一線。今現在は心配ない。オレはまだ人間を辞めるつもりはないんだから。

結局、彼女の言うとおり会うことはなかった。

自ら踏み込めば会える可能性はあったし、彼女に会うためならそれぐらいしても良かったのだけど、そんな我が身が犠牲になる事に多少、踏ん切りがつかない自分がいた。

先輩なら迷うのだろうか。…いや、あの人でもそこまで潔さを発揮しないだろう。

「ちわ先輩。今日は鉄板焼きですか？」

「おう。コレを直して広島風好み焼き作ろうと思ってな」

鉄板焼きのバナ―部分を何やら弄りながら此方に応える。

「大丈夫ですか？なんか素人が扱っていいようなシロモノに見えないんですが」

「なに、前にもガスコンロ直したことあるし。ようは、そのサイズ違いなだけだろ」

「いやいや、それと家庭用コンロを同じ物と見える時点でマズイ感じがしますよ」

そうか？　と言いながらも作業は止めない先輩。ホント、器用な人だ。

「先輩も人のこと言えませんか。オレは他人に対して危機感足りませんけど、貴方は自身に対して危機感足りませんよね。……前から気になってたんですけど、どうしてそんな自分に無関心なんですか？」

「まあ、そうだな。そのあたり、置いてきちまつたんだ」

「……どこに忘れてきたんですか？」

「いや、それはもういいんだよ。もう十年以上前の忘れ物だ。今更回収したところで、それに価値を見い出せそうにないし。……まあ、それはそれで良い事ないけど」

悪いコトばかりじゃないとも言える辺りが羨ましい。それと、神父さんにいい様に使われている理由がなんとなくわかった。

「それよりさ、おまえのこと聞かせるよヒヨコ。なんでそんな他人に興味を持つんだ。それに最近やたらと俺の家に来るし、そんなに楽しいか？」

それは、確かに楽しいに近い感情はある。でも、楽しいわけではない。

「楽しいとは思ってないはずです。けど、オレは他人に関わっていたいと思うんです」

「…そうか」

うん、無理だわ、これ、と先輩のガラクタ弄りが終わる。

「でも、なんでまた？」

「自分から変われないから、じゃないかと。オレは昔から、何かに変化する事が嫌いだったんです。もし、何かが無くなったりすると元通りにしないと気が済まなっただので」

人間は変化を嫌う生き物。ただ、その変化こそ生き物が進化する事に必要な刺激。そして、その変化が大きければ大きいほど、劇的な変化が起こるのだ。

「潔癖症みたいなものだな。それ、生まれつきか？」

「たぶん。はつきりと自覚したのが一年前なんで。毎日に変化がなく、そんな当たり前のような日々が両親が死んだ事で大きく変わってしまいそうになって。そこで、どうしようもない不安に襲われたんです。家だってまだ、変わった所も無かったのに、もう自分の家じゃないようにさえ思えました」

「……まだ、失ってもしないのにな」

「だからですよ。突然失うなら、心の準備とか此方の都合なんてお構いなしですけど、失うことがわかっていると、なんというか、変に時間があるせいか不安になるんです。どうせ失うなら、変わってしまうのなら、すぐにでもそうなって欲しい。なのに、待ち時間なんてモノがあるから——」

先輩は眉間に皺を寄せている。

それが同情によるモノか。それとも理解しかねる感情によるモノか。

願わくば前者であって欲しい。

その後の談話は、特に珍しい内容ではなかった。

時刻は午後六時。珍しく時間を忘れて話し込んでしまった。

毎日、変化なく時を刻む古時計の合図。

「——ああ、もう帰らないと。また、明日も来てもいいですか？」

部屋の出口で振り返る。

「悪い。明日は予定があるんだ」

先輩はきっぱりと断る。

そういうことなら仕方がない。誰だって自分のための時間があるんだし。ましてや、卒業間際で進路が決まっていけないオレは、本気で今後どうするか決めねばならない。

結局、先輩には別れの言葉を言えなかった。

帰宅途中。階段を下り終えた辺りでアンリさんに出会った。いつか聞きたいと思っていた疑問を投げかけてみると。

なるほど、と疑問はあっさり解決する。どうしても確認しておきたかった彼女の気持ちは予想外なモノだった。

「――」

それを聞いて、アンリさんは彼に相応しい人間なのだと思います。

ようやく、神父さんがオレに忠告した内容の意味が分かった。半端な気持ちで近寄ったオレが馬鹿みたいに。

でも、オレ達みたいな人間にはああいう人間が身近に必要なだ。だから、これからも色々な他人と関わり続けるだろう。

出会うことがありえない人たちが出会ったんだ。生きていれば、案外あっさりと出会うのが人生だ。

もうすぐ四月だというのに街は記録的な寒さに見舞われていた。

自分にとっては華々しい社会人デビューだった。

「悪いね。君は不採用だ」

会社の偉い人はそれだけを告げて、忙しいからもう帰ってくれろ？と去っていった。くそっ、あまりにも簡潔過ぎやしないか。もっと、こうオブラートに包みこんだ言い方ってものがあるはずなのに、それがこうもストレートに断られてしまった。

「……なあ石井。断る理由はともかく、これって酷過ぎない？」

卒業して一週間。

就職も進学も出来なかったオレは地元就職した友達と夕飯を食べていた。…もっとも、社会の荒波についてグチを言いたいだけなのだが。

「いいんじゃないの。あつちはあつちで回りくどいコトしないでおまえを気遣ってるんだよ。ネチネチ言われるより、キツパリ言ってくれたんだから優しいと思うぞ」

「うげ。なにその、いらない優しさ。オレはお前のそのプラス思考が羨ましいよ」

あれで優しいというなら、もっとヤバい会社があるというのか。コイツの会社はどういう指導してんだよ。

「まあ、グチの方は後で聞いてやるよ。それより、お前から飯に誘ったんだから、グチが言いたいだけじゃないだろ？」

「……それだけなんだけど」

「はあ？ 本気でそれだけなのか！？」

本気でそれだけなんだけどなあ。…まあ、他にあるとしたら、

「じゃあ、楽で稼ぎの良い仕事ねえか？ほら、気楽にやっていけそうな感じの」

「……ははは。んなもんあつたら俺がいきてえよ。だいたい、そんな仕事内容でおまえを雇ってくれるとしたら、まともな仕事じゃねえだろ」

「だよなあ。でも、そっち方面しかオレには無いような気がしてくるんだよ。…ほら、まともな会社断られてるし、対人関係に臆病にもなってる感じだし」

「ははは。おまえが人に対して臆病とかマジありえねえ。ありえねえし、想像できねえよ」

「笑い事じゃないって。こっちはそれなりに悩んでるんだぞ。…まあ、不安があるといえは全くないけど」

「だろ。まあ、そうだな。アドバイスにならないけど、自分の特性を生かした仕事を探してみるのがいいいんじゃないかねえの？おまえなら営業とか人と関わる仕事なんていけそうだぞ？」

「無理。いくら初対面の人でも普通に話せるからって、敬語では話せねえから。普通にタメ口になりそう」

「誰にでも話せる弊害みたいなモノか。まあ、その方がバランスいいのかもな」

……コイツに相談したのが間違いだったかなあ。いくら学生の頃に仲が良かったからってオレと同じで頭が悪いんじゃない、どうしようもない。

神父さんに相談してみようかな。

——いや、あれに頼ったらオレの命運はそこまでだ。いろんな理由つけられて、一生あの人の駒として生きることになる。

まだ、自分の人生をドブに捨てたくない。絶望はしているけど。

「……なあ、彼野。話は変わるけど、ちょっと前にあの公園で事件があった。解決したっていうけど、詳しい情報は開示されていないし、気にならないか？」

「……………」

外はシンとする寒さだというのに淀んだ空気が満載の空間。気にしないように忘れかけていた場所を指さす石井。

「立て続けに事件が起きたっていうのに、こつもあっさりと静かに

なるからな。なあ、おまえなら何か情報が入っているだろう?」

「……いや。オレもテレビで流れているような事しか知らないよ」

「——そうか」

石井は、そういいながら興味深そうに公園から視線を外さない。

「でも、なんでオレにそんな事を聞くんだ? おまえなら一般人の俺より何か知っているだろ?」

肩をすくめながら此方に顔を向ける。

「まだ、仕事して一週間も経っていないんだぞ。雑用しかやらしてもらえない新人がそんな深い話を聞ける筈がねえよ」

溜め息交じりで肩を落とす石井。理想と現実のギャップというやつだろう。なんだかんだ言いながらも夢を持って記者になったからな。コイツも苦労しているようだ。

「だからこそ聞いたんだよ。おまえは顔が広いし、色々と聞いてそうだから。…で、本当に何も知らないのか?」

「…しつこいなあ。なんだおまえ。実用しかやらしてもらえないからって情報でも掴んで実力を見せようって魂胆か？」

「まあ、そんなところだ」

グイツとグラスの水を飲み干す石井。あれで酒を飲んでいるとしたら、ヤケ酒のそれだ。……酒を飲め。

「わかるか彼野。…いや、おまえには分からないだろうな。毎日、雑誌に載せる広告の整理と資料のコピー、そんな作業が延々と続くんだぞ。取材にも行かず、ただデスクでタバコ吸いながらコーヒーを飲んでだけの奴を見てるとおまえ等がやれって思うよ。そして、オレは取材に出回ってバンバン働いてやるっていうのに」

…面倒な流れになった。此方が愚痴を言いたくて夕食に誘ったというのに、これでは立場が逆だ。

「…でもさ、新人ってのはそういうもんだろ？いいように使われて時間が経つにつれて仕事内容が変わっていくのが仕事ってもんだ」

「んな事は分かっている。けどな、仕事場の先輩を見てるとそう言いたくなるだよ」

水おかわり、と店員に呼びかける。いつそ酒を飲め。

「ああ、そうだ。編集長の話を盗み聞きして、関係ないかもしれないけど情報があつたな。確かに、死んだ二人なんだけど、繋がりがあつたみたいなんだよ。でも、誰かに殺されたような形跡も証拠もないし、誰かに恨まれてたような事もないから、たんなる偶然だろうって言ってたな」

……偶然、なのか。

自殺ではないのは確かなのはあるが、その二人に関連性があつた事はオレは知らない。一人目の男は、なにか目的があつて彼女と会つたようだが、それと二人目の方と何か関連性あるのだろうか。

……まずいなあ。関わらないようにしているのに無性に知りたくなつた。

「なあ、その繋がりがつてなんだ？」

「さあ？盗み聞きだつたからな。その辺は聞き取れなかつたけど、まあ、そんな意味はないと思うぞ？」

新米とはいえ、使えないな、こいつ。意味がないこそ、価値がある

モノがあるというのに。

しけた街灯の下。噂の公園がイヤに目立つ。

「ま、関係ないのかもな」

「そうそう。知っても意味がないって。それより、俺の話を聞けって」

そう言いながらバクバクと山盛りだったポテトを平らげ、店員に水のお代わりを要求する石井。そのおかわり、実に七杯目。いっそ、ジョッキで飲め。

「おまえの話を聞いても、どうせグチでつまんねえよ」

何か頼もうとメニューを取る。

…
というか。

今更だけど、この店って、酒おいてなかったんだね。

彼女と再会してからは事件は何もなかったように収束に向かった。

連続殺人、集団自殺。様々な憶測が流れては、確かな確証も証拠もなく結果、現場証拠と状況から偶然に同じ場所で起きた自殺と警察は発表した。

奇妙な噂が多い大暮市でも、ここまで大事に報道されるのは珍しい。これは何かの前触れかな、と期待してみたりしたが、そんなことはなく今ではいたって普通の田舎町になっている。それこそ、嵐が過ぎ去った後の静けさのようなものだ。

いや、騒がしいよりは静かな方が良いんだけどね。ただ、つい二か月前に全国放送されていたっていうのに、この静けさは許せないっていうか……ま、これが田舎町ってわけか。

「おお、なにやら真剣な面持ち……。さては面接に落ちたから落ち込んでいるのではないのかキミ。大丈夫！そんな時こそお姉ちゃんの胸にドーンと飛び込んできなさい」

隣に座った寝間着姿の姉御は無い胸を張りながら話しかけてくる。

進学も就職も出来なかったオレは、バイトしながら一人暮らしを始めようと思ったが姉の言葉に甘えてしまい、今もこの家に住んでいる。いわゆるニートというやつだ。ただ、何もしていない訳じゃない。家事炊事はオレが行い、それで就活をするという形になっている。といつても、やっている事は学生の頃と何も変わっていない。

変わった事があるとするならば、姉が大暮市勤務になった事くらいだ。それによつて前よりは家に帰ってくるようになったのだが、基本的にはあまり変わらず、出来る女らしくあちこちから引つ張りだこである。月に一週間から二週間程度は家を空ける。そのかわり、姉が頼んだようで、かの神父さんがよくちよく様子を見に来て、町で何かある度にお話ならぬ取り調べを受けるといふ監視付きだ。

「……なんでそんな残念そうな目で見るのかな。こんな美人のお姉ちゃんと抱擁が出来るのに何が不満なのよっ」

美人かどうかはさておき、女性として重要な部分の欠損に気づかない姉は不機嫌極まりない表情で此方を睨めつける。

さて、とソファーから立ち上がりテレビの電源を切る。

「ちょっとー。まだ私が見てるのに何で消すのよ。まだまだ夜は長いだぞー」

「朝は早いんだろ？さっさと寝て明日に備えろって」

「ふふつ、明日は休みなのだ。だから明日の事は気にせず自由を満喫できるのだよ、我が弟よ」

ヒヤッホー、とソファーの上で暴れまわる。姉の少ない休日、このボロいソファー兼姉専用の寝床から始まるのだった。

「ああ、明日は休みなんだ。……ふーん。なら神父さんのところに行かないとまずいぞ。前に来た時に暇が出来たら話があるから来いって言ってたよ」

しかし、リフレッシュ休暇は、ものの見事に消滅したのであった。

「……人使いの荒い神父だなあ……」

まあ、それはこちらとしては都合の良い展開ではあるのだが。

姉が神父さんに呼ばれた時はしばらく家の留守にする。こっちから連絡でもない限り滅多にあっちから連絡はしてくることはないだろう。もちろん帰ってくることも。

しばらく調べたいことがあるから帰りが遅くなるし、姉が居ない間は神父さんが来るから面白そうな話が聞けそうだ。

「じゃ、オヤスミさん」

テーブルに置かれた缶ビールを睨みながら真剣に悩んでいる姉を無視してさっさと二階の自室に向かう。…あれは確実に飲むだろう。

鼻歌などを嗜みつつ、階段を上がる。途中、ブシュツと耳障りの良い音が聞こえてくる。言うまでもない。リビングからヒシヒシと感涙に似た声が聞こえてくる。

あれは確実に明日の事を忘れて飲もうという魂胆だが、姉は知らないだろう。オレが神父さんに連絡を入れている事に。

気がつけば一週間も経っていた。

市内の聞き込み、公園付近の探索、図書館通いから神父さんとの探り合い。新しい謎へ夢中になり過ぎ、知らぬ間にヤバげな世界に片足を突っ込みそうになっていた程だ。

少し考えなしに行動し過ぎたと反省する。

顔見知りから、数回しかあった事のない知人、そこからさらに増えた繋がりから情報を集めてきたが、オレは重要な人物の事を忘れていた。

「……すっかり抜けてたなあ。でも、あの人、居るかわかんないし」

上池邸は大暮市門前二丁目の裏手。敷地内に神社がある一軒家。山に挟まれた大暮市の北側に位置し、駅から徒歩一時間弱、車なら十五分程度、という位置関係だ。

同じような場所に住む俺が言うのもなんだが、かなり不便な場所だ。近くにバス停はないし、かといって徒歩で移動するのは大変だ。そりゃあ、好き好んで住んでいる訳じゃないだろうし、行動範囲は狭いはずだから何とも思っていないだろうが、せめて自販機の一つは近くにあつて欲しいところだ。

つまり、あの辺境に行くような人物はモノ好きな人が暇な奴、あるいは目的がある人間に限られる。

季節は春。街は冬を越え、色とりどりに飾られているというのに先

輩の家の周りは季節感を感じさせないほど寂しい風景になっている。

えーと、こんなにカラス多かつたっけ？

先ほどからヤケにカラスの鳴き声が響く。いよいよ、噂に違わぬ雰
囲気を漂わせるようになってきた。

あれから二か月しか経っていないとはいえ、雪が無くなっただけで
特に変化がないというのは偏執的だ。

「げ。鍵、しまってる」

いや、もともと予想していた事だ。今から戻って来るのを待つのは
面倒だし、いいか、どうせ会えない訳じゃないし。

ふと、気になる事を思い出し、上池邸の裏手に回る。あそこはいつ
も気になっていたが、見る機会がなかったからな。さすがに家の住
人が居ないときに入るのは忍びないが、ま、一応居留守を使われて
いないか確認という事でここは一つ。

「はい、お邪魔しますよ、と」

初めて来た時から気になっていた空間へ踏み込む。

「？　なんだ、ただの池じゃないか」

とりあえず近づいて中に魚が居ないか確認してみるか。もし、いるなら、それはおそらく先輩の非常食なのだろう。サクサクっと池に近づく。池の水はとても綺麗だ。おかしいなあ、こんな水の流れがなさそうな所なのになんでだろう。

「……あつ。なんだ、湧水が湧いているのか」

池の底からコポコポと泡と一緒に水が湧き出ているのが確認できる。

ばしゃん、と水に手を入れる。

「——うわ。すげえ冷たい」

人の手が入らず、そっと昔のまま残った清里のような池だ。

一時間ほど池を眺めながら過ごしたが、結局、先輩は帰って来なかった。今どんな生活をしているのか、家の周りを調べて把握できた。オレは神秘的な趣の池を後にする。先輩だって生活があるんだ。オレだってルールを守らなければならないんだ。それに、どうせ先輩とは結局赤の他人なんだし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6153x/>

エデンの死角

2012年1月8日20時49分発行